『比較論理学研究』第 4 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2006)

# スティラマティ著『中辺分別論釈疏』〈帰敬偈〉のテクスト校訂及び和訳

松岡寛子

## 0. はじめに

本稿は，説者マイトレーヤ (Maitreya, ca. 350–430)[1]，語り手アサンガ (Asaṅga, ca. 395-470) による本偈とヴァスバンドゥ (Vasubandhu, ca. 400-480) による注釈を備えた『中辺分別論』(Madhyāntavibhāga) 冒頭部〈帰敬偈〉に対する，スティラマティ (Sthiramati, ca. 510-570) の復注書『中辺分別論釈疏』(Madhyāntavibhāgaṭīkā) のサンスクリット再校訂テクスト及び和訳を提示するものである。

『中辺分別論釈疏』の現存する唯一のサンスクリット写本は，1928 年，Sylvain Lévi 氏によってカトゥマンドゥにて確認されたものである。各葉に三分の一程度の欠損が全体にわたり，状態は良くない[2]。同写本に基づくとされるサンスクリット校訂テクストとしては，Bhattacharya & Tucci 本，Yamaguchi 本，Pandeya 本がある。Bhattacharya，Tucci 両氏によるものは，序章を含む第一章「相品」(lakṣaṇapariccheda) のみの刊本であり，後に Obermiller 氏の書評と Stcherbatsky 氏の訳注によって部分的に訂正案が提示されている。Yamaguchi 氏による刊本は全章にわたる。Yamaguchi 本の校訂ミスは，『中辺分別論釈疏』よりも後に写本が確認された，『中辺分別論』のサンスクリット校訂に携わった長尾雅人博士によって，その成果に基づいて訂正がなされている[3]。Bhattacharya & Tucci 本と Yamaguchi 本は，いずれも同一の写本とチベット語訳を使用したものであるが[4]，両テクストに相互間の言及はない。Pandeya 氏によるものは，Yamaguchi 本の文法的誤りを訂正する趣旨で刊行されたが，チベット語訳が参照されていない[5]。

これら三本のうち[6]，Yamaguchi 本が，後に公刊された翻訳と索引を併せて三部作として『中辺分別論』研究の先鞭をつけた一大金字塔であり，最も評価されるべきものであることは疑い得ない。Yamaguchi 本の問題点としては，校訂ミスが多いことは公刊当初より指摘されてきた。近年

---

[1]以下，三論師の年代はいずれも早島 [2003] による。なお，「説者」は praṇetṛ，「語り手」は vaktṛの訳語であり，前者がマイトレーヤ，後者がアサンガを指示することはスティラマティによって明示されている。See MVṬ 2, 4; 2, 8.

[2]本稿で取り扱う箇所の写本 (Ms) は，Ms1，Ms2a，及び Ms2b の計三葉である。特に，Ms1 は最も破損が激しく，欠損していない箇所がわずか六分の一程度に過ぎない。Ms2a と Ms2b は三分の一程度が欠損している。

[3]長尾 [1978]。

[4]従来，MAVṬの写本は二種存在しており，そのうち一方の行方が不明であるとみなされてきたが，金 [2006:42] は，一方がもう一方の複写であり，そもそも一種しか存在していなかったことを指摘する。従来の見解については長尾 [1963:23], 梵語仏典 335–336 参照。

[5]de Jong [1977], Wayman [1977], 長尾 [1978], 梵語仏典 337 参照。

[6]三穂野 [2003] は，第一章「相品」第一節「虚妄分別」の再校訂としては最新のものであるが，本稿で取り扱う序章を含まないのでここには掲げていない。既存刊本，チベット語訳の校合によるテクスト校訂，及び翻訳研究がなされている。

においても写本に基づく訂正案の具体例を挙げることにより，写本の再評価が提唱されている[7]。しかしながら，写本に基づく訂正のなされ得る部分は限られる。実際，写本は当時よりも破損が進んでいる。チベット語訳から還元しなければならない部分は拡張している。写本の欠損している箇所，つまりチベット語訳から還元されたサンスクリットテクストにもまた，問題がある。チベット語訳からの逐語訳ではあるが，サンスクリットとして不自然なものがある。この問題は還元サンスクリットを索引や電子テクストデータベースにおいて逐一検索することによって，補完され得ると考える。近年，成果の目覚ましい仏教論理学分野をはじめ，インド思想全般にわたり電子テクストデータベース化の進行している現在においては，決して不可能ではない。このように，『中辺分別論釈疏』所出の言い回しや表現を，インド思想全般に敷衍し，異同を明らかにすることにより，結果的に『中辺分別論釈疏』のもつ性格をも明らかにし得る。

したがって，Yamaguchiを底本として，同写本，チベット語訳，及び各刊本を校合することに加え，写本のDiplomatic Editionをデータベース化したうえで，『中辺分別論』写本や『中辺分別論釈疏』写本の現存する箇所のチベット語訳，さらにACIP (Asian Classic Input Project)[8]やGRETIL (Götingen Register of Electronic Texts in Indian Languages) などの各種電子テクストデータベース[9]を活用することによって，より改良された再校訂テクストの作成を目指す。

なお，このサンスクリット再校訂テクスト及び和訳は，試行版であり，さらに改良される余地があることを付言しておく。また，筆者は，この方法で，『中辺分別論釈疏』の序章の後半部〈論書の本体〉，及び第一章「相品」のテクスト校訂を続行中である。サンスクリット還元の根拠をより確実なものとするために，他のテクストの類似表現など，あるいは筆者の考え違いなどについて，諸賢のご指摘やご意見を請いたい。

---

[7] 金 [2006]。

[8] http://www.asianclassics.org/research_site/index.html

[9] http://www.sub.uni-goettingen.de/ebene_1/fiindolo/gretil.htm

## 1. 文献情報

本稿で使用するテクストは次のとおりである。

### (1)『中辺分別論』(Madhyāntavibhāgabhāṣya)

(1-1) 写本

MVBh[Ms] Madhyāntavibhāgabhāṣya, *Jounal of the Bihar and Orissa Research Society*, 21–2.

(1-2) サンスクリット校訂テクスト

MVBh[Na] Madhyāntavibhāgabhāṣya (Vasubandhu): Gadjin Nagao, ed. *Madhyāntavibhāga-bhāṣya.* 鈴木学術財団, 1964.

MVBh[Ta] Madhyāntavibhāgabhāṣya (Vasubandhu): Nathmal Tatia & Anantalal Thakur, ed. *Madhyānta-vibhāga-bhāṣya*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

本稿は，MAVBh[Na] を底本として用いる。

(1-3) チベット語訳

MV(Tib) Dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i tshig le'ur byas pa (Byams pa-Thogs med): Tibetan translation of Madhyāntavibhāgakārikā. D No. 4021, Phi 40b1–45a6; P No. 5522, Phi 43b4–48a8.

MVBh(Tib) Dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel pa (Dbyig gnyen): Tibetan translation of Madhyānta-vibhāgabhāṣya (Vasubandhu). D No. 4027, Bi 1b1–27a7; P No. 5528, Bi 1–32b6.

(1-4) 漢訳

弥勒造, 玄奘訳『辯中邊論頌』 1 巻, T No. 1601, Vol. 31.

世親造, 真諦訳『中邊分別論』 2 巻, T No. 1599, Vol. 31.

世親造, 玄奘訳『辯中邊論』 3 巻, T No. 1600, Vol. 31.

(1–5) 「序品」・「相品」を含む現代語訳

葉阿月

[1975] 「中辺分別論相品の比較研究」 『唯識思想の研究—根本真実としての三性説を中心にして—』(東方研究会), pp.1–76; 「真実品の比較研究」(同), pp. 77–164.

長尾雅人

[1976] 「中辺分別論」『大乗仏典１５：世親論集』(中央公論社), pp. 215–358.

Kochumuttom, Thomas A.

[1982] *A Buddhist Doctrine of Experience: A New Translation and Interpretation of the Works of Vasubandhu, the Yogacarin* (Delhi: Motilal Banarsidass), pp. 27–89.

Anacker, Stefan

[1984] "Commentary on the Separation of the Middle from Extremes (Madhyāntavibhāgabhāṣya)." In *Seven Works of Vasubandhu*: *The Buddhist Psychological Doctor* (Delhi: Motilal Banarsidass), pp. 211–286.

### (2)『中辺分別論釈疏』(Madhyāntavibhāgaṭīkā)

(2-1) 写本

MVṬ[Ms] Madhyāntavibhāgaṭīkā (Sthiramati): *Madhyāntavibhāgakārikā, Bauddhadarśanaviṣaya*, No. 233, Nepal : National Archives.

(2-2) サンスクリット校訂テクスト

MVṬ[Bh/T] Madhyāntavibhāgaṭīkā (Sthiramati), ed. by Vidhushekhara Bhattacharya & Giuseppe Tucci, *Madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyaṭīkā of Sthiramati: Being a Sub-commentary on Vasubandhu's Bhāṣya on the Madhyāntavibhāgasūtra of Maitreyanātha Pt. 1*, Luzac & Co., London, 1932.

MVṬ[Ya] Madhyāntavibhāgaṭīkā (Sthiramati): Susumu Yamaguchi, ed. *Madhyāntavibhāgaṭīkā*, 東京: 破塵閣, 1934.（再版　鈴木学術財団, 1966.）

MVṬ[Pa] Madhyāntavibhāgaṭīkā (Sthiramati): Ramchandra Pandeya, ed. *Madhyānta-vibhāga-śāstra: Containing the Kārikā-s of Maitreya, Bhāṣya of Vasubandhu and Ṭīkā by Sthiramati*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1971.

本稿は，MAVṬ[Ya] を底本として用いる。

(2-3) チベット語訳

MVṬ(Tib) Dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel bshad (Blo brtan); Tibetan translation of Madhyānta-vibhāgaṭīkā (Sthiramati), D No. 4032, Bi 189b2–318a7; P No. 5534, Tshi 19b7–170b8.

(2-4) 「序品」・「相品」を含む現代語訳

山口 益

[1935] 『安慧阿闍梨耶造・中辺分別論釋疏』破塵閣. (再版　鈴木学術財団, 1966.)

Stcherbatsky, Theodore

[1936] *Madhyanta-vibhanga: Discourse on Discrimination between Middle and Extremes Ascribed to Bodhisattva Maitreya and Commented by Vasubandhu and Sthiramati.* Bibliotheca Buddhica 30. Reprint, Delhi: Sri Satguru Publications, 1992.

Friedmann, David Lasar

[1937] *Madhyāntavibhāgaṭīkā: Analysis of the Middle Path and the Extremes*, Utrecht: Utr. Typ. Ass.

三穂野 英彦

[2003] 「*Madhyāntavibhāga* 第一章相品における理論と実践」(広島大学博士論文)

(2-5) その他

Obermiller, Eugene

[1933] "Review of *Madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyaṭīkā* of Sthiramati: Being a Sub-commentary on Vasubandhu's *Bhāṣya* on the *Madhyāntavibhāgasūtra* of Maitreyanātha, ed. by Vidhushekhara Bhattacharya & Giuseppe Tucci", *The Indian Historical Quarterly*, Vol. IX, No. 3.

山口益

[1937] 『漢蔵対照弁中辺論 附 中辺分別論者釈疏梵文索引』破塵閣. (再版　鈴木学術財団, 1966.)

長尾雅人

[1978] 「『中辺分別論安慧釈』の梵文写本との照合—その第一章相品について—」『鈴木学術財団研究年報』15.

## 2. テクスト校訂及び和訳

・以下，MVBh と MVṬのテクスト校訂に際して，MVBh[Na]，MVṬ[Ya] をそれぞれ底本として用いる。
・校訂テクストおよび和訳の表記の形式については，以下のような規則に従う。

1）MVBh 及び MVṬのサンスクリットテクストは，写本や既存刊本などを用いて校訂したものを提示する。

2）/ 及び , の挿入・削除は任意に行う。

3）saṃdhi は任意に処理し，avagraha（'）は任意に挿入する。また，sambandha, saṃbandha 等の鼻音の anusvāra 化は異読に数えない。

4）段落分けは任意に行う。

・特に，脚注番号の形式については，以下のような規則に従う。

[1], [2], . . . MVBh では，Na, T, Ms の順に，MVṬでは，Ya, Pa, Bh/T の順に各校訂テクストを提示する。MVṬに関しては，Ob, Stch, Na が再校訂を提案している箇所については，それらも掲げる。異読のない箇所については，. . . (Ya) . . . , . . . (Bh/T) . . . というようにして省略する。

1, 2, . . . サンスクリットテクスト校訂の根拠を提示する。

1), 2), . . . チベット語訳の D, P 間の異読を提示する。セミコロン (;) の前に掲げられた読みを採用する。

(1), (2), . . . 和訳に関して必要な脚注を提示する。また，サンスクリットテクストとチベット語訳間に異読がある場合，チベット語訳に基づく和訳を提示する。

・和訳中の〔〕は翻訳の補いを，() は同義語もしくは原語を示す。

・その他，特に写本の Diplomatic Edition の表記に使用した略号については，本稿末尾の (1) 一般的略号を参照されたい。

## (1) ヴァスバンドゥ著『中辺分別論』〈帰敬偈〉のテクスト校訂及び和訳 (MVBh[Na17, 3–4; T1, 4; Ms1b1])

MVBh[D1b1; P1b1–2]

rgya gar skad du / madhyāntabibhāgaṭīkā(1) /
bod skad du / dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel pa /

### 表題

サンスクリット名: *Madhyāntavibhāgaṭīkā*
チベット名: *dBus dang mTHa' rNam par 'byed pa'i 'Grel pa*

MVBh[D1b1; P1b1]

bam po dang po //

中邊分別論 [T451a7]: 相品第一
辯中邊論 [T464b7]: 辯相品第一

第一章（相品）

MVBh[Na17, 1; T1, 3; Ms1b1][1]
namo buddhāya /

MVBh[D1b1; P1b3]

'jam dpal gzhon nur gyur pa la phyag 'tshal lo //

### 帰敬

ブッダに礼拝し奉る[1]。

---

[1]Na: namo buddhāya /
T: oṃ namo buddhāya /

---

(1)D; P: madhyāntabibhāgaṭīka.

---

[1]チベット語訳では，帰敬対象が「マンジュシュリー（Mañjuśrīkumārabhūta，文殊師利法王子)」である。

**0**

**0.1**

MVBh[Na17, 3–4; T1, 4; Ms1b1][2]

**śāstrasyāsya praṇetāram abhyarhya sugatātmajam /**

**vaktāraṃ cāsmadādibhyo yatiṣye 'rthavivecane //**

MVBh[D1b1–2; P1b3–2a1]

**bstan bcos 'di ni rab mdzad pa //**

**bde gshegs nyid skyes bdag sogs la //**

**'chad pa la yang mngon mchod nas //**

**don rnams dbye phyir 'bad par [P2a] bya //**

中邊分別論 [T451a8–9]

**恭敬善行子　能造此正論　爲我等宣説　今當顯此義**

（善行子の能く此の正論を造れると我等が為めに宣説する人とに恭敬して，今此の義を顕すべし）

辯中邊論 [T464b8–9]

**稽首造此論　善逝體所生　及教我等師　當勤顯斯義**

（此の論を造れる善逝体所生と及び我等を教うる師とに稽首して，斯の義を顕すを勤むべし）

## 0 序章〈帰敬偈と論書の本体〉

### 0.1 〈帰敬偈〉

**善逝子である，本『論書』（＝『経』）を説かれた方（マイトレーヤ）と，我々をはじめとする者たちのために〔本『論書』を〕語られた方（アサンガ）とに礼拝して，〔七〕主題を分析するために，私（ヴァスバンドゥ）は尽力しよう。**

[2]Na, T.

## (2) スティラマティ著『中辺分別論釈疏』〈帰敬偈〉のテクスト校訂及び和訳 (MVṬ[Ya1, 1–5, 9; Bh/T3, 1–6, 3; Pa3, 8–5, 24; Ms1, 1–2b1])

MVṬ[D189b2; P19b7–8]

rgya gar skad du / madhyanntabibhāgaṭīkā[(2)] /
bod skad du / [P19b8] dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel bshad /

### 表題

サンスクリット名 : *Madhyāntavibhāgaṭīkā*
チベット名 : *dBus dang mTHa' rNam par 'byed pa'i 'Grel bshad*

MVṬ[Ya12; Bh/T-; Pa3.7; Ms-][3]
[ . . . ][10)]

MVṬ[D189b2; P17b8]

'jam dpal gzhon nur gyur pa la phyag 'tshal lo //

### 帰敬

聖文殊師利童子 (āryamañjuśrī-kumārabhūta) に礼拝し奉る。

---

[3]Ya, Pa: *āryamañjuśriye kumārabhūtāya namaḥ /*
Bh/T:-; Ms:-

---

[10)] この帰敬句はチベット語翻訳者によるもの ('gyur phyag) であるから，Ya, Pa のように還元する必要はない。

---

[(2)]D; P: madhyantabibhagaṭīkā.

**0.1.1**

MVṬ[Ya1, 1–10; Bh/T3, 1–8; Pa3, 8–14; Ms1, 1–2][4]

[Ms1] *prāyaḥ śiṣṭā*[11] *gurum abhimatadevatāṃ cābhyarhya*[12] *karmasu pravartanta*[13] *ity ayam apy svayaṃ śiṣṭakramānuvar*tī[14] madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyaṃ cikīrṣus tatpraṇetur vaktuś ca pūjāṃ *kṛtvā tadarthavibhāgāya pravṛtta iti pradarśayann āha /*

***śāstrasyāsya praṇetāram***

*ityādi /*

*evaṃ kṛtvā ko guṇaḥ prāpyate / guṇavato hitakāriṇaś ca pūjayatāṃ puṇyam upacīyate/ puṇyāny upacitāni samārabdhavato vighnavināya*kair anupahatān alpena prayāsena samāpayantīti /[15]

---

[4]Ya: *uttamajanā hi prāyaśo guruṃ śraddhādevatāṃ cābhyarcya karma*su pravartanta ity ayam apy aham uttamajananayam anuvartī madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyaṃ cikīrṣur [iti jñāpanārthaṃ] tatpraṇetur vaktuś ca pūjāṃ *kṛtvā tadarthavibhāgāya prayukta iti pratipādayann āha, śāstrasyāsya praṇetāram prāpyata ityādi, evaṃ kṛtvā ko guṇaḥ prāpyata iti / guṇavadbhyo hitakāribhyaś ca pūjayānānā*m eṣāṃ puṇyam upacīyate / puṇya upacite samārambhād vighnavināyakair anupahatān alpena prayāsena samāpayantīti /

Pa: *uttamajano hi* . . . (Ya) . . . pravartata . . . (Ya) . . . cikīrṣus tatpraṇetur . . . (Ya) . . . *śāstrasyāsya praṇetāram prāpyate / guṇavato hitakārinaś ca pūjayatā*m eṣāṃ . . . (Ya) . . . /

Bh/T: *śiṣṭā hi prāyeṇa gurum iṣṭadevatāṃ cābhyarcya karma*su pravartanta ity ayam apy [svayaṃ śiṣṭakra]mānuvartī madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyaṃ cikīrṣus tatpraṇetur vaktuś ca pūjāṃ *kṛtvā tadarthaviniścaye pravṛtta iti pradarśayann āha / śāstrasyāsya praṇetāram ityādi / evaṃ kṛtvā ko guṇaḥ prāpyata iti / guṇavata upakārakasya ca pūja*yaiṣāṃ puṇyam upacīyate / [puṇyopacaye sa]mārambho vighnavināyakair anupahato 'lpena prayāsena samāpyata iti /

Ob: . . . (Bh/T) . . . *tadarthavibhāgāya* . . . (Bh/T) . . . /

Stch: *śiṣṭākramānuvartī* . . . (Bh/T) . . . *tadarthavibhāgāya* . . . (Bh/T) . . . pūjāyām puṇyam upacīyate /. . . (Bh/T) . . . /

Ms1, 1: ]+rtī madhyāntavibhāgasūtrabhāṣya+ cikīrṣus tatpraṇetur vaktuś ca pūjāṃ+[, Ms1, 2: ]+kair anupahatān alpena prayāsena samāpayantīti /

---

[11]ya rabs dag ni, *śiṣṭāḥ (Bh/T, Stch). チベット語訳 ya rabs dag に対応するサンスクリット原語としてśiṣṭāḥを想定し，ni は単なる強調助辞として敢えて hi を挿入しないものとする。

ya rabs は，ārya に対応し，Ya, Pa の uttamajana は「勝れたる人」(山口 [1935:1, 5])，'noble man' とも解し得るかもしれないが，種々の論書の帰敬偈解釈にそれらの語の使用を認めることができない。諸論書の帰敬偈解釈ではśiṣṭa あるいは sat (Tib: dam pa)「正しい行いをする人」といった語の使用が見られる。śiṣṭa に関しては CS を例に挙げよう。CS 1.1.21: abhīṣṭadevatānamaskāras tu granthādau śiṣṭācāraprāptaḥ paramaśiṣṭenāgniveśena kṛta eva anyathā śiṣṭācāralaṅghanena śiṣṭatvam eva na syād vyākhyānāntarāyabhayaś ca tathā granthāviniveśitasyāpi namaskārasya pratyavāyāpahatvāc ca na granthaniveśanam // sat に関しては，下記注 15) の帰敬偈の範型にかかわる AKV や PVSVṬ，PVṬの引用を参照されたい。

[12]dang . . . mchod nas, *cābhyarhya. Cf. MVBh 17, 3: abhyarhya; D1b1: mchod nas.

[13]'jug ste, *pravartanta. Ms の 'pravartata' を 'pravartanta' と訂正すべきという Ya の注記に従う。但し，当該箇所の Ms は現時点で欠損している。See Ya 1, n. 1.

[14]bdag . . . ya rabs kyi tshu, *svayaṃ śiṣṭakramānuvartī (Stch). チベット語訳には anuvartin に対応する語がない。Cf. AKV I 2, 15-16: sadācārānuvṛtti; dam pa rnams kyi spyod pa'i rjes su 'jug pa.

[15]帰敬偈 (maṅgala) には，一般的に，祈願 (āśis)，敬礼 (namaskāra)，内容紹介 (vastunirdeśa) という三つの役割がある。Cf. KĀ I.1: sargabandho mahākavyam ucyate tasya lakṣaṇam / āśīrnamaskriyā vastunirdeśo vāpi tanmukham // 1.14 //

帰敬偈解釈はこのような範型に則って行われる。たとえば，ヤショーミトラは次のように帰敬偈解釈を行う。

AKV I 2, 7–18: guṇākhyānamātreṇa māhātmyāvabodho na namaskāreṇeti cet / na / tasya tat sūcakatvāt / namaskāreṇa hi māhātmyaṃ sūcyate / atha vā guṇākhyānenaiva māhātmyaṃ jñāpyate na namaskāreṇa / namaskārārambhas tu svapuṇyaprasavārthaṃ / sadācārānuvṛttipradarśanārthaṃ vā / kṛtābhimatadevatāpūjāstutinamaskārā hi santaḥ kriyām ārabhanta iti satām ācārāt / tatra māhātmyajñāpanaṃ kim artham ity ācakṣmahe /;

P3a5–8: 'gal te yon tan brjod pa tsam gyi che ba'i bdag nyid khong du chud de phyag 'tshal bas ni ma yin no zhe na / ma yin te / de ni de brjod par byed pa yin pa'i phyir te / phyag 'tshal bas ni che ba'i bdag nyid legs par brjood par byad do // rnam pa gcig tan yon tan brjod pa kho nas che ba'ibdag nyid shes par byed de phyag 'tshal bas ni ma yin no // phyag 'tshal ba tsom pa ni rang gi bsod nams 'phel ba'i phyir ro // rnam pa gcig tu na dam pa rnams kyi spyod pa'i rjes su 'jug par rab tu bstan pa'i phyir te / dam pa rnams kyi spyod pa ni mngon par 'dod pa'i lha mchod pa dang bstod pa dang phyag byas nas bya ba rtse ma pa yin no //

(荻原 [1933:3]:「唯だ徳を讃えるのみにて尊高なることを覚る，敬礼に由るに非ずと云うならば，然らず，(1) 敬礼は尊高を指示するものなるが故なり，所以は，敬礼にて尊高は指示せらるればなり。或は復た，(2) 唯だ徳を讃えるの

MVṬ[D189b2–189b5; P19b8–20a3]

ya rabs dag ni phal cher bla ma dang / dad pa'i lha la mchod nas las rnams la 'jug ste / dbus dang [P20a] mtha' rnam par 'byed pa'i mdo(3) bshad par 'dod pas / bdag la yang 'di ni ya rabs kyi(4) tshul can no zhes shes par bya ba'i phyir / de mdzad pa dang 'chad pa la mchod nas / de'i don rnam par dbye bar zhugs so zhes rab tu bstan pa'i phyir /

**bstan bcos 'di ni rab mdzad pa /**

zhes bya ba la sogs pa smos so //

de ltar byas na yon tan ci zhig thob ce na / yon tan dang ldan pa dang / phan 'dogs 'dogs pa la mchod na bsod nams 'phel bar 'gyur ro // bsod nams 'phel na yang dag par rtsom(5) pa la bar chad dang bgegs kyis mi tshugs par tshegs(6) chung(7) ngu rdzogs par 'gyur ro //

---

みにて尊高を知らむ，敬礼に由に非ざれども，敬礼を申ぶるは己の福を生ずるが為なり。或は，(3) 良き習慣 (sadācāra, dam pa rnams kyi spyod pa) に倣うことを示すが為なり，所以は，希望する神 (abhimatadevatā, mngon par 'dod pa'i lha) を供養し (pūjā, mchod pa) 賛嘆し (stuti, bstod pa) 敬礼し (namaskāra, phyag byas) て所作を始むと云うが，善人の行いなるが故なり」)

同様の帰敬偈解釈は，ダルマキールティの Pramāṇavārttika に対するシャーキャブッディによる復註 (PVṬ)，対応するカルナカゴーミンの復註 (PVSVṬ) にもある。ただし，PVSVṬ(Skt) には，ya rabs dag ni . . . so // に該当する箇所がない。

PVṬ[D1b3–2a1]: ya rabs dag ni phal cher bstan bcos rtsom pa la 'dod pa'i lha la phyag byas so (P; byed do D) // de bas na slob dpon 'di yang bdag nyid dam pa rnams dang spyod pa mthun par bstan par bya ba dang / khyad par du (D; P *om.*) 'phags pa'i lha la bstod pas bsod nams 'phel la / bsod nams 'phel bas kyang bstan bcos bgegs med par tsar phyin pa dang 'chad par byed pa dang / nyan par byed pa rnams sngar bstod nas zhugs pa las bsod nams skye ba'i phyir gzhan gyi don gzigs nas / rtog pa'i dra ba rnams bsal cing (P; zhing D) // zhes bya ba la sogs pa khyad par du 'phags pa'i lha la mchod pa brtsams so //

(桂 [1994:35]:「先賢たち (ya rabs dag) は，概して (phal cher)，論書を始めるにあたって，好ましい神格に対する帰敬 ('dod pa'i lha la phyag) を行ってきた。だからこの〔ダルマキールティ〕先生も，(1) 自らが良き人々と行いが同じであることを示さねばならないこと，(2) とりわけすぐれた神格 (khyad par du 'phags pa'i lha) に対する称賛によって〔自らの〕福徳を増大し，さらに〔その福徳の〕増大によって，論書が支障なく完成すること，そして，(3)〔本書を〕解説する〔注釈〕者や〔その〕聴衆のためにまず〔仏の〕称賛を先立てる活動をする（つまり，帰敬偈をおく）ことによって〔他者に〕福徳を生じるから，他者の利益となるとお考えになって，'vidhūtakalpanā' 云々と，とりわけすぐれた神への崇拝〔の偈〕を始めたのである」)

PVSVṬ[D1b–2a]: ya rabs dag ni phal cher bstan bcos rtsom pa la 'dod pa'i lhas la phyag byas so // de bas na slob dpon 'di yang bdag nyid dam pa rnams dang spyod pa mthun par bstan par bya ba dang / khyad par 'phags pa'i lha la bstod pas bsod nams 'phel la / bsod nams 'phel bas kyang bstan bcos bgegs med par [2b] tshar phyin pa dang / 'chad par byed pa dang / nyan par byed pa rnams sngar bstod nas zhugs pa las bsod nams skye ba'i phyir gzhan gyi don gzigs nas / rtogs pa'i dra ba rnams bsal cing zhes bya ba la sogs pa khyad par du 'phags pa'i lha la mchod pa brtsams so //;

Sāṅkṛtyāyana 1, 14–19: yady api hi śāstrārambhe namaskāraślokopanyāsam antareṇa kāyavāṅmanobhir iṣṭadevatānamaskārakaraṇena puṇyopacayād avighnena śāstrasya parisamāptir bhavati / tathāpi vyākhyātṛśrotṛṇāṃ stutipurasarayā pravṛttyā puṇyātiśayotpādāt pārārthyaṃ sadācārānupālanaṃ cālocya viśiṣṭadevatāpūjāślokam upanyastavān ācāryaḥ / vidhūtakalpanetyādi /

(桂 [1994:25]:「実に，たとえ論書の始めに帰敬偈 (namaskāraśloka) をおかなくても，身口意によって好ましい神格 (iṣṭadevatā, khyad par 'phags pa'i lha) に対する帰敬を行うことによって福徳 (puṇya) を積むから，支障なく論書 (śāstra) は完成するとしても，〔ダルマキールティ〕先生は，〔本書を〕解説する〔注釈〕者や〔その〕聴衆のために〔仏の〕称賛 (stuti) を先立てる活動をする（つまり，帰敬偈をおく）ことによって，〔一層〕卓れた福徳を生じることができるから，他者の利益になること (pārārthya) と，良き人々の習慣 (sadācāra) を遵守することとを考慮して，とりわけすぐれた神格 (viśiṣṭadevatā, khyad par du 'phags pa'i lha)（すなわち，仏）に対する崇拝 (pūjā, mchod pa) の偈を〔冒頭に〕'vidhūtakalpanā' 云々とおいたのである」)

---

(3) P; D *ins.* rnam par.

(4) D; P: kyis.

(5) D; P: rtson.

(6) P; D: tshogs.

(7) D; P: chu.

### 0.1.1 〈帰敬偈〉第一解釈

教養ある人々 (śiṣṭa) は，通常，〔自らの〕師 (guru) と〔自らの〕信仰する神格 (abhimatadevatā) に礼拝して〔注釈〕作業にとりかかる。したがって，彼（師ヴァスバンドゥ）もまた，自ら，教養ある人々の作法に従って (śiṣṭakramānuvartin)，『中と辺とを分別する経』(Madhyāntavibhāgasūtra) を注釈することを望む者であるから，それ（『経』）を説かれた方 (praṇetṛ)（聖マイトレーヤ）と語られた方 (vaktṛ)（師アサンガ）に対する礼拝をなして，それ（『経』）の意味の弁別にとりかかるということを理解させるために，〔次のように帰敬偈を〕述べる。

**本『論書』を説かれた方に**

云々と。
【問】以上のように〔注釈作業の開始に際して『経』を説かれた方と語られた方に対する礼拝を〕なして，いかなる功徳 (guṇa) が得られるのか。
【答】功徳を備えた方々 (guṇavat) と利益をもたらす方々 (hitakārin) を供養する人々 (pūjayat) の福徳 (puṇya) は増大する。福徳はそれが増大したとき，活動を開始した人々が事故や妨害によって阻害されることなく少ない努力で (alpena prayāsena) 目的を達成するのを促す。

### 0.1.2

MVṬ[Ya1, 11–2, 2; Bh/T3, 8–12; Pa3, 15–17; Ms1, 2][5]

atha vā *praṇetruktasya vaktṛvivṛtasya ca samādānaṃ kathayatā praṇetṛvaktrayoś ca sūtravṛttyoś ca gauravotpādanārtham* [16] /[Ya2]

***śāstrasyāsya praṇetāram***

*iti sarvam uktam /*

MVṬ[D189b5–6; P20a3–4]

yang na mdzad pas gsungs pa dang / 'chad pas bshad pa yang dag par byin par bsnyad pas / mdzad pa dang / 'chad pa dang / mdo dang 'brel pa[8] la gus pa bskyed par bya ba'i phyir /

**bstan bcos 'di ni rab mdzad pa /**

zhes bya ba thams cad smos so //

### 0.1.2 〈帰敬偈〉第二解釈

あるいはまた，説かれた方（聖マイトレーヤ）によって述べられたこと（『経』）(praṇetrukta) と語られた方（師アサンガ）によって注釈されたこと (vaktṛvivṛta)（『注釈』）とを正しく受容していること (samādāna) を伝える方 (kathayat)（師ヴァスバンドゥ）は，説かれた方（聖マイ

[15]Ya: atha vā praṇetṛpraṇeya[vaktṛvākyasamādāna]pravacanāt sūtra*praṇetṛvaktṛvṛttiṣu gauravotpādanārtham āha, śāstrasyāsya praṇetāram iti, sarvam /*

Pa: atha vā praṇetṛpraṇeyapravacanāt . . . (Ya) . . . /

Bh/T, Na: atha vā *samyakpratipāditasya praṇetroktasya vaktrā vivṛtasya ca kathanena praṇetari vaktari sūtre bhāṣye ca gauravam upādayituṃ śāstrasyāsya praṇetāram iti sarvam uktam /*

Stch: atha vā *praṇetroktasya vaktrā ca vivṛtasya samyakpratipādanakathanena* . . . (Bh/T) . . . /

Ms1, 2: a(tha vā)[

[16]Cf. AKV I 24, 21: etad vyākhyānaṃ sūtrānugatam ity abhiprāyaḥ /, MV[D40b1; P43b4]: bod skad du / dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i tshig le'ur byas pa ('byed pa'i tshig le'ur byas pa D; 'byed pa P), MVBh[D1b1; P1b1] bod skad du / dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel pa /

[8]D: 'brel pa; P: 'grel pa.

トレーヤ）と語られた方（師アサンガ）と『経』(sūtra) と『注釈』(vṛtti) に対する敬意を引き起す (gauravotpādana) ために[2],

**本『論書』を説かれた方に**

という〔帰敬偈の〕全体を述べている。

**0.1.2.1**

**0.1.2.1.1**

MVṬ[Ya2, 3–8; Bh/T3, 12–16; Pa3, 18–4, 1; Ms1, 3][6]

*tatra praṇetruktatvanirdeśāt sūtre gauravam utpadyate /*

*asya* kārikāśāstrasyāryamaitreyaḥ praṇetā / sa caikaj*ātipratibaddhatvāt sarvabodhisattvābhijñādhāraṇīpratisaṃvitsamādhīndriyakṣāntivimokṣaiḥ paramapāramitāprāptaḥ sarvabodhisattvabhūmiṣu* [Pa4] *ca niravaśeṣaprahīṇāvaraṇaḥ*[17] */*

MVṬ[D189b6–7; P20a4–7]

de la mdzad pas bshad par bstan pas mdo la gus pa skye ste /

'di ltar bstan bcos tshig le'ur byas pa'i[9] mdzad pa po[10] ni 'phags pa byams pa ste / de yang skye ba gcig gis thogs pa'i phyir / byang chub sems dpa'i mngon par shes pa dang gzungs dang so so yang dag par rig pa dang / ting nge 'dzin dang / dbang dang bzod pa dang / rnam par thar pa thams cad kyis[11] dam pa'i pha rol tu son pa / byang chub sems dpa'i sa thams cad la sgrib pa yang ma lus par spangs pa'o //

[6]Ya, Na: *tatra praṇetrā vaktum upadiṣṭāt sūtre gauravam* utpadyate / yasmād asya kārikāśāstrasyāryamaitreyaḥ praṇetā, sa caikaj*ātipratibaddhāt sarvabodhisattvābhijñādhāraṇīpratisaṃvitsamādhīndriyakṣāntivimokṣaiḥ paramam pāram gataḥ sarvāsu bodhisattvabhūmiṣu niḥśeṣam api prahīṇāvaraṇaḥ /*

Pa: *tatra praṇetṛvacanāt sūtre* . . . (Ya) . . . / yasyāsya . . . (Ya) . . . / sa caikaj*ātipratibandhāt* . . . (Ya) . . . /

Bh/T: *tatra* praṇetṛpraṇeyapravacanāt sūtre [gaurava]m utpadyate / asya kārikāśāstrasyāryamaitreyaḥ praṇetā sa caikaj*anmanā pratibaddha iti sarvabodhisattvābhijñādhāraṇīpratisaṃvitsamāpattivaśitākṣāntivimuktīnāṃ paramaṃ pāraṃ gataḥ sarvāsu bodhisattvabhūmiṣu niḥśeṣeṇa prahīṇāvaraṇaḥ /*

Ob: . . . (Bh/T) . . . sa caikaj*ātipratibaddha iti sarvabodhisattvābhijñādhāraṇīpratisaṃvitsamādhivaśitākṣāntivimokṣāṇāṃ* . . . (Bh/T) . . . /

Stch: *tatra praṇetroktapradarśanāt sūtre* . . . (Ya) . . . /

Ms1, 3: ]+kārikāśāstrasyāryamaitreyaḥ praṇetā / sa caikaj[

[17]Cf. TrBh 22, 11: tasyāṃ hy avasthāyām ālayavijñānāśritadauṣṭhulyaniravaśeṣaprahāṇād ālayavijñānaṃ vyāvṛttaṃ bhavati /; D152a7: de'i tshe kun gzhi rnam par shes pa la gnas ngan len ma lus par spangs pa'i phyir / kun gzhi rnam par shes pa ldog par 'gyur te /「なぜならば，その段階（阿羅漢位）において，アーラヤ識にある麁重（dauṣṭhulya）を残りなく断滅するから，アーラヤ識は「止滅する」のである」)

[9]D: bstan bcos tshig le'ur byas pa'i; P: bstan bcos tshig le'ur byas pa ni.

[10]D: mdzad pa; P: mdzad pa po.

[11]P; D: kyi.

[2]ヤショーミトラは，敬意の生起する過程を次のように説明する。AKV I 2, 17–21: tatra māhātmyajñāpanaṃ kimartham ity ācakṣmahe / tadgauravotpādanārtham / gauravotpādanaṃ punas tatpravacanasatkṛtyaśravaṇārtham / satkṛtyaśravaṇaṃ krameṇa śrutacintābhāvanāmayaprajñotpādanārtham/ tadutpādanaṃ kleśaprahāṇārtham / tat punaḥ sarvaduḥkhopaśamalakṣaṇanirvāṇaprāpaṇārtham iti prayojananiṣṭhā /（荻原 [1933: 3]:「此の中にて，尊高を知らしむるは何の為か，吾人は言うべし，彼に対する尊重心を生ずるが為なり，尊重心を生ずるは，復た彼の所説を恭しんで聞くが為なり，恭しんで聞くは，聞くことと，思うことと，修むることの慧を順次に生ずるが為なり，此等を生ずるは，煩悩を断つ為なり，此は復た，一切の苦の寂滅を特徴とする涅槃を得るが為なり，以上にて所為完了す」)

### 0.1.2.1 帰敬対象

#### 0.1.2.1.1 聖マイトレーヤと『経』

それ（帰敬偈）の中で，説かれた方（聖マイトレーヤ）によって述べられたということが示されているから，〔読者に〕『経』に対して敬意が起こる。

このカーリカー体の論書 (kārikāśāstra) を説かれた方は聖マイトレーヤ (āryamaitreya) である。さらに，彼（聖マイトレーヤ）は，一生にのみ縛られた〔菩薩〕(ekajātipratibaddha, 一生所繋)[3]であるから，菩薩のすべての (1) 神通力 (abhijñā) と (2) ダーラニー (dhāraṇī) と (3) 覚知 (pratisaṃvit) と (4) 三昧 (samādhi) と (5) 根 (indriya) と (6) 忍 (kṣānti) と (7) 解脱 (vimokṣa) によって最高の彼岸へ既に到達していて，菩薩のすべての階位における障害 (āvaraṇa) をもまた残りなく既に断滅している[4]。

#### 0.1.2.1.2

MVṬ[Ya2, 8–11; Bh/T3, 17–20; Pa4, 1–4; Ms1, 4][7]

*vaktṛsamādānadvāreṇa vṛttyāṃ* gauravam utpadyate / vaktā punar atrācāryāsaṅgas tasmāc chru*tvā-cāryabhadantavasubandhuḥ etadbhāṣyam /*

*tayor api prajñāprakarṣayogād* [18] *aviparītapratipattidhāraṇopadeśasamarthatvād iha sūtrārtho*

[7]Ya: *vaktṛsamādānadvāreṇa vṛttyāṃ* gauravam utpadyate / vaktā punar atrācāryāsaṅgas tasmāc chru*tvācāryabhadanta-vasubandhuḥ tadbhāṣyam akarot / tau apy uttamaprajñāvato 'bhrāntiprativedhadhāraṇopadeśasāmarthyād atra sūtrārtho 'bhrāntam upadiṣṭa iti vṛttyāṃ gauravam utpadyate /*

Pa: *vaktṛsamādānadvāreṇa vṛttau* gauravam utpadyate / vaktā punar atrācāryāsaṅgaḥ . . . (Ya) . . . *tayor uttamaprajñāvator abhrānti°* . . . (Ya) . . . *vṛttau gauravam utpadyate /*

Bh/T: vaktuḥ samyakpratipādanamukhena bhāṣye gauravam utpadyate / vaktā [cāsyā]cācāryāsaṅgaḥ / tasmāc chru*tvācāryavasubandhus tasya bhāṣyam akarot / tau ca paramaprajñāv ity abhrāntāvabodhau dhāraṇopadeśasamarthāv itīhābhrāntaṃ sūtrārtham upadiśata iti bhāṣye gauravam utpadyate /*

Stch: . . . (Bh/T) . . . / tasmāc chru*tvācāryabhadantavasubandhus* . . . (Bh/T) . . . /

Ms1, 4: ]+gauravam utpadyate vaktā (punar atrā)cāryāsaṅgas tasmāc chr[

[18]shes rab mchog, *prajñāprakarṣa, *uttamaprajñā, *paramaprajñā. AKV III や BCAP IX などに用例がある。Cf. AKV III 286, 21–22: sa evāvasthikaḥ prakarṣayogāt prākarṣikaḥ /（山口・舟橋 [1955: 169, 4-5]:「同じそれが遠続に約せるも

[3]ekajātipratibaddha は「一生補処」,「一生所繋」と漢訳され，現在の一生を過ぎれば仏処を補うことのできる，最高の菩薩位のことである。四種菩薩（初発心・行六波羅蜜・阿毘跋致（不退）・一生補処）と菩薩十位の内容，関連についての考察として平川 [1968:283–420] がある。Cf. AKV III 332, 32: ekajātipratibaddhasya iti / ekajanmapratibaddhabuddhatvasya /（山口・舟橋 [1955: 442, 1–2]:「一生所繋の〔菩薩〕とは，仏となることについて，一の生 (janman) によって繋せられた者である」），AsP 435: yas teṣāṃ bhagavan prathamayānasaṃprasthitānāṃ bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ cittotpādānanumodate, avinivartanīyānāmapyavinivartanīyadharmatām anumodate, ekajātipratibaddhānām api bodhisattvānāṃ mahāsattvānām ekajātipratibaddhadharmatām anumodate, kiyat sa bhagavan kulaputro vā kuladuhitā vā bahutaraṃ puṇyaṃ prasavati /（梶山・丹治 [1975:243]:「世尊よ，それらはじめて〔大〕乗に進み入った菩薩大士たちの発心を随喜し，菩薩の修行を行うものたちの発心をも随喜し*，もはや退転することのない〔菩薩大士〕たちの不退転の境位をも随喜し，もう一生だけ〔迷界の生存に〕束縛されている〔一生補処〕菩薩大士の，もう一生だけ〔迷界の生存に〕束縛されている境位をも随喜する良家の男子や女子は，世尊よ，どれほど多くの福徳を得るでしょうか」）*サンスクリット原文にはない。

本論書のように，ekajātipratibaddha は，特に聖マイトレーヤの呼称としてしばしば用いられる。Cf. 三彌勒經疏 [T313a15–17]: 舊云彌勒皆訛也。此菩薩今身死生兜率。過多數死生。還生彼天。最後死而生人方成佛。名一生補處。

[4]ここでは一生所繋の菩薩の徳目（＝自在力, vaśitā）として七種列挙されるが，他の文献で一致するものが見出されなかった。DBhS では十二種，LV では十種がそれぞれ挙げられる。See DBhS 1, 8–2, 8, LV I 1, 13–16.

LV I 1, 13–16: sārdhaṃ dvātriṃśatā ca bodhisattvasahasraiḥ, sarvair ekajātipratibaddhaiḥ sarvabodhisattvapāramitānirjātaiḥ sarvabodhisattvābhijñāvikrīḍitaiḥ sarvabodhisattvadhāraṇīpratilabdhaiḥ, 〈sarvabodhisattvapratibhānapratilabdhaiḥ〉 sarvabodhisattvapraṇidhānasuparipūrṇaiḥ sarvabodhisattvapratisaṃvidgatiṃgataiḥ sarvabodhisattvasamādhivaśitāprāptaiḥ sarvabodhisattvavaśitāpratilabdhaiḥ sarvabodhisattvakṣāntyavatīrṇaiḥ sarvabodhisattvabhūmipparipūrṇaiḥ /（外園 [1994: 701, 21–26]:「また，三万二千人の菩薩を伴えり。〔すなわち〕すべて一生補處にして，一切の菩薩の波羅蜜に熟達し，一切の菩薩の神通もて遊戯し，一切の菩薩の陀羅尼を獲得し，《一切の菩薩の弁才を獲得し》一切の菩薩の誓願を成満し，一切の菩薩の無礙解に通暁し，一切の菩薩の三昧自在を得，一切の菩薩の自在を獲得し，一切の菩薩の菩薩地を成就したる〔諸菩薩〕を〔伴えり〕」）

*'viparīta upadiṣṭa*[19] *iti bhāṣye gauravam utpadyate /*

MVṬ[D190a1–3; P20a7–20b2]

[D190a] 'chad pas yang dag par byin pa'i sgo nas 'grel pa la gus pa skye bar 'gyur te / 'di la 'chad pa ni slob dpon thogs med do // de las slob dpon btsun pa dbyig gnyen gyis gsan nas 'di'i 'grel pa mdzad de /

de gnyis kyang shes rab mchog dang ldan pas ma nor bar rtogs pa dang / gzung ba[12] dang ston nus pas 'dir mdo'i don ma nor bar[13] bstan to zhes 'grel pa la gus pa skye ste /

### 0.1.2.1.2 師アサンガと『注釈』

語られた方（師アサンガ）が〔『経』を〕正しく受容していること (samādāna) を通して，〔読者に〕『注釈』(vṛtti) に対して敬意が起こる。さて，ここにおける，語られた方とは軌範師アサンガである。軌範師大徳ヴァスバンドゥは，彼（師アサンガ）から〔『注釈』を〕聴聞したのち，その『注解』(bhāṣya) を著した。

彼らは両者（師アサンガと師ヴァスバンドゥ）ともに卓越した慧 (prajñāprakarṣa) を備えている[5]。それゆえ，錯誤なきものに通達し，〔それを〕保持し，〔それを〕説示することができる。それゆえ，これ（『注釈』）において，錯誤なき『経』の意味が示されている。したがって『注解』(bhāṣya) に対して敬意が起こる。

---

のなりとは，同じその分位に約せるものは，多時 (prakarṣa) と相応せるによっては遠続に約せるもの (prākarṣika) である」）; BCAP IX 228, 27: sa ca prajñāprakarṣagamanāt saṃpadyate /; HBṬ: tato mahākaruṇāyāgāt samīcīnam upadiśati prajñāprakarṣayogāc ca bhūtaṃ samādhā(sasādha)nam iti prakāśitam /.

[19]ma nor bar rtogs pa, *aviparītapratipatti. Cf. NM: ekatrāpratipattiḥ itaratra viparītapratipattiḥ /

ma nor bar ston pa, *aviparītopadeśa. Cf. NVTṬ: yathādṛṣṭasyeti matsaritayā viparītopadeśo nivāritaḥ /

'dir mdo'i don ma nor bar bstan to, *iha sūtrārtho 'viparīta upadiṣṭa. Cf. NBh: . . . aviparītajñānārtham ihopadeśaḥ . . .

ここでは，二つの aviparīta の解釈が問題となる。まず，aviparītapratipatti を検討してみよう。aviparītapratipatti には，(1) Karmadhāraya 複合語，あるいは (2) Genitive Tatpuruṣa 複合語という二種の解釈の可能性が想定される。それぞれの解釈によって二番目の aviparīta の還元は異なることになる。

(1) の場合，「錯誤のない通達」，すなわち「錯誤なく通達する」と解される。この場合，後半は，'sūtrārtho 'viparītam upadiṣṭa' (Ya: sūtrārtho 'bhrāntam upadiṣṭa) と還元される。''viparītam' は副詞となる。全体としては，「〔両者は，〕誤りなく，〔『経』に〕通達し，〔『経』の意味を〕保持し，〔人々に〕説示することができる。それゆえ，これ（『注釈』）において，『経』の意味が誤りなく示されている」と解される。チベット語訳はいずれも 'ma nor bar'（「誤りなく」）というように副詞とみなし，この読みを支持していることは疑いない。Cf. PrP 3, 1–2: . . . ācāryāryanāgārjunasya viditāviparītaprajñāpāramitānīteḥ karuṇayā parāvabodhārthaṃ śāstrapraṇayanaṃ . . . （丹治 [1988: 2, 8–10]「…般若波羅蜜の誤りない説明方法に通暁している尊いナーガールジュナ師が，悲によって他者を覚らせるために，〔この〕『〔中〕論』を著された，…」）

一方，(2) の場合，「錯誤なきもの（＝真実）の通達」，すなわち「錯誤なきものに通達する」と解釈される。この場合，後半は，'sūtrārtho 'viparīta upadiṣṭa' (Bh/T: abhrāntaṃ sūtrārtham upadiśata) と還元されよう。''viparītaḥ' は 'sūtrārthaḥ' と同格である。全体の意味は，「〔両者は，〕錯誤なき〔真実〕に通達し，錯誤なき〔真実〕を保持し，錯誤なき〔真実〕を説示することができる。それゆえ，これ（『注釈』）において，錯誤なき『経』の意味が示されている」となろう。ここでは，(2) の解釈と還元サンスクリットとを提案しておく。

---

[12]P: gzung ba; D: bzung ba.

[13]P: ma nor bar; D: ma nor ba.

---

[5]Cf. AKBh I 2, 3: prajñāmalā sānucarābhidharmaḥ（櫻部 [1969: 137, 3]:「無垢の慧とおよび〔それに〕伴う〔法〕とがアビダルマである。(一・二 a)」），AKBh I 2, 6: tatprāptaye yāpi ca yac ca śāstram /（櫻部 [1969: 137, 7]:「また，それを得るための〔慧〕なるものも，論書なるものも〔アビダルマ〕である。(一・二 b)」）

**0.1.2.2**

**0.1.2.2.1**

MVṬ[Ya2, 12–13; Bh/T4, 1–2; Pa4, 4; Ms1, 5][8]

[Bh/T4] *itthaṃ ye pudgalapramāṇa*kās teṣāṃ sūtra*vṛttyor* gauravotpattiḥ /

MVṬ[D190a1–2; P20a8–20b1]

de ltar gang dag gang zag [P20b] tshad mar byed pa de dag ni / mdo dang 'grel pa la gus pa skye'o //

**0.1.2.2 読者**

**0.1.2.2.1 人を権威とする読者**

このようにして，人を権威とする (pudgalapramāṇaka) 彼ら（読者）には『経』と『注釈』に対して敬意が起こる。

**0.1.2.2.2**

MVṬ[Ya2, 13–15; Bh/T4, 3–6; Pa4, 4–6; Ms-][9]

*ye 'pi dharmapratisāriṇas*[20] *te sūtrabhāṣyayoḥ svartham*[21] *avagacchanti / niścaya utpanne saty*[22]

---

[8]Ya: *evaṃ ye pudgalaṃ pramāṇīkurvanti* teṣāṃ sūtra*vṛtti*gauravotpattiḥ /

Pa: . . . (Ya) . . . sūtra*vṛttyo* gauravotpattiḥ /

Bh/T: *evaṃ ca ye pudgalāḥ prāmāṇi*kās teṣāṃ sūtra*bhāṣyayor* gauravotpattiḥ /

Stch: *evaṃ ca ye pudgalaprāmāṇī*kās . . . (Bh/T) . . . /

Ms1, 5: ](k)ās teṣāṃ sūtra[+++++]gauravotpattiḥ /[

[9]Ya: *ye ca dharmānusāriṇas teṣāṃ sūtravṛttyoḥ śubhārthe 'vabodhaḥ, jāte ca niścaye iyaṃ praṇetur vaktuś ca pratītyā prabhāvanā na tu tarkāgamamātreṇa prabhāvaneti praṇetṛvaktṛgauravotpattiḥ /*

Pa: . . . (Ya) . . . *śubhārthā* . . . (Ya) . . . /

Bh/T: *ye 'pi dharmānusāriṇas te sūtrabhāṣyayoḥ sadartham avagacchanti / jāte ca niścaye teṣāṃ praṇetur vaktuś cāvabodhāt pravicayo bhavati / tārkikāṇāṃ cāgamamātreṇa pravicayo nāpacīyata iti praṇetari vaktari ca gauravotpattiḥ //*

Ob: *ye 'pi dharmapratisāriṇas* . . . (Bh/T) . . *.niścayaś ced utpadyate* (or *cej jāyate*) *sa praṇetṛvaktravabodhaprabhāvito bhavati / na kevalam āgamamātra prabhāvitas tārikāṇām /* . . . (Bh/T) . . . /

Stch: *ye 'pi dharmapratisāriṇas* . . . (Bh/T) . . . *niścayaś ced utpadyate sa praṇetṛvaktravabodhād api prabhāvito bhavati , na kevalam āgamamātreṇa tārkikaiḥ prabhāvito bhavatīti* . . . (Bh/T) . . . /

Ms: -

---

[20]chos la rton par bya, *dharmpratisārin (Ob, Stch). ここでは，直前の *pudgalapramāṇaka*（人を権威とする者）との対比されていることにより，〈依法不依人〉ということが意図されている。chos la rton pa の還梵として，*dharmānusārin* (Ya, Bh/T)（Cf. MVyut §46: 1022(14) dharmanusārin, chos kyi rjes su 'brang ba, 随法）より，*dharmapratisārin* (Ob, Stch) がふさわしいのでこれを採用する。Cf. MVyut §74: 1546(1)artha-pratisaraṇena bhavitavyaṃ na vyañjana-pratisaraṇena, don la rton par bya'i tshig 'bru la rton par mi bya, 依義不依語. 1547(2)jñānapratisaraṇena bhavitavyaṃ na vijñāna-pratisaraṇena, ye shes la rton par bya'i rnam shes la ston par mi bya, 依智不依識. 1548(3)nītārtha-sūtra-pratisaraṇena bhavitavyyaṃ na neyārtha-sūtrapratisaraṇena, nges pa'i don gyi mdo sde la rton par bya'i drang ba'i don gyi mdo sde la rton par mi bya, 依了義経不依未了義経. 1549(4)dharma-pratisaraṇena bhavitavyaṃ na pudgala-pratisaraṇena, chos la rton par bya'i gnag zag la rton par mi bya, 依法不依人. Cf. 維摩経巻下法供養品「義に依りて語に依らざれ，智に依りて識に依らざれ，了義経に依りて未了義経に依らざれ，法に依りて人に依らざれ」; 大般涅槃経第六「当に四法に依るべし，何等をか四となす，法に依りて人に依らざれ，義に依りて語に依らざれ，智に依りて識に依らざれ，了義経に依りて未了義経に依らざれ」

[21]don bzang po, *svartha. Cf. LV I 2, 14–15: saddharmaṃ deśayati sma ādau kalyāṇaṃ madhye kalyāṇaṃ paryavasāne kalyāṇaṃ svarthaṃ suvyañjanaṃ kevalaṃ paripūrṇaṃ pariśuddhaṃ paryavadātaṃ brahmacaryaṃ saṃprakāśayati sma //; D4b: de thog mar dge ba / bar du dge ba / tha mar dge ba / don bzang po / tshig 'bru bzang po / ma 'dres pa / yongs su rdzogs pa / yongs su dag pa / yongs su dkar ba'i chos ston te / tshangs pa'i spyod pa yang dag par ston to //（外園 [1993: 702, 20–22]:「初め善く，中間も善く，終わりも善く，意義妙にして語巧妙なる，正法を説きたまえり。純粋，円満，清浄にして，純白なる梵行を開示したまえり」）

[22]nges pa skyes na, *niścaya utpanne sati について。Locative Absolute であることを明示するために sati を挿入して還

*ayam praṇetṛvaktravabodhenāpi prabhāvito* [23] *na kevalam āgamatarkābhyām eveti praṇetṛvaktṛgauravotpattiḥ /*

MVṬ[D190a2–3; P20b1–2]

gang yang chos la rton pa de dag ni mdo dang 'grel pa'i don bzang po khong du chud de nges pa skyes na 'di mdzad pa dang 'chad pa yang rtogs pas rab tu phye ba yin gyi[14] / rtog ge dang lung tsam gyis rab tu phye bar ni ma[15] zad do zhes mdzad ba dang / 'chad pa la[16] gus pa skye'o //

### 0.1.2.2.2 教法に依拠する読者

一方,〔人ではなく〕教法に依拠する (dharmapratisārin) 彼ら（読者）は,『経』と『注釈』の優れた意味 (svartha) を理解する。しかしながら,〔彼らに〕決定 (niścaya) が生じたとき，それ（決定）は，ただ単に教説 (āgama) と理論 (tarka) に基づいてのみ〔生み出された〕のではなく，説かれた方と語られた方の理解に基づいてもまた生み出されたもの (prabhāvita) なのである，というように〔教法に依拠する読者にも〕説かれた方と語られた方に対して敬意が起こるのである。

### 0.1.3

### 0.1.3.1

MVṬ[Ya2, 16–17; Bh/T4, 7; Pa4, 7; Ms1, 6][10]

*i*dam idānīṃ *vaktavyaṃ kīdṛ*grūpaṃ **śāstraṃ** ki*ṃ ceti /*

MVṬ[D190a3–4; P20b2–3]

da ni bstan bcos kyi rang bzhin ci 'dra ba dang / ci'i phyir bstan bcos zhes bya ba 'di bshad par bya'o //

### 0.1.3 各語義解釈

### 0.1.3.1 'śāstrasya'

【問】次に，以下のことが語られるべきである。論書とはどのようなものなのか。また，なぜ，「論書」(śāstra) と呼ばれるのか。

---

[10]Ya, Stch: *i*dam idānīṃ *vaktavyaṃ kīdṛśaṃ śāstra*rūpaṃ, śāstraṃ ki*ṃ ceti*
Pa: . . . (Ya) . . . / śāstraṃ ki*ṃ cet*
Bh/T: *i*dam idānīṃ *śāstrasya kiṃ sva*rūpaṃ / ki*m ity ucyate /*
Ms1, 6: ]dam idānī[++++++]rūpaṃ śāstraṃ ki[

---

梵する。

[23]*ayam praṇetṛvaktravabodhenāpi prabhāvito. rtogs pa, *avabodha (Bh/T, O, Stch). rab tu phye ba, *prabhāvita (O, Stch). Cf. MVBh II 33, 14–16: bodhyaṅgeṣu dṛṣṭidoṣaḥ teṣāṃ darśanamārgaprabhāvitatvāt/ mārgāṅgeṣu dauṣṭhulyadoṣaḥ / teṣāṃ bhāvanāmārgaprabhāvitatvāt /; lta ba'i nyes pa ni byang chub kyi yan lag rnams la sgrib ste / de dag mthong ba'i lam gyis rab tu phye ba'i phyir ro // gnas ngan len gyi nyes pa ni lam gyi yan lag rnams la sgrib ste / de dag bsgom pa'i lam gyis rab tu phye ba'i phyir ro // Lokesh によれば prabhāvanā(Ya, Pa) のチベット語訳で rab tu phye ba はあるが，MV では用例がない。また，pravicaya (Bh/T) は，チベット語訳が rab tu rnam par 'byed pa であるから適さない。

---

[14]D; P: gi.
[15]P; D *om.*
[16]D; P *om.*

**0.1.3.1.1**

MVṬ[Ya2, 17–20; Bh/T4, 8–11; Pa4, 7–10; Ms1, 7][11]

*nāmapadavyañjanakāyapratibhāsā*[24] *vijñaptayaḥ* ***śāstram*** */ atha vā lokottarajñānaprāpakaśabdaviśeṣapratibhāsā*[25] *vijñaptayaḥ* ***śāstram*** */*

*kathaṃ vijñaptayaḥ praṇīyanta ucyante vā /*

*praṇetṛvaktṛvijñaptiprabhavatvāc śravaṇavi*jñaptīnām[26] nā*tra doṣaḥ*[27] */*

MVṬ[D190a4–5; P20b3–4]

ming dang tshig dang yi ge'i tshogs su snang ba'i rnam par rig pa rnams ni **bstan bcos** so //

yang na 'jig rten las 'das pa'i yer shes thob par byed pa'i sgra'i khyad par du snang ba'i rnam par rig pa rnams **bstan bcos** so //

rnam par rig pa rnams ji ltar mdzad cing brjod ce na /

mdzad pa dang 'chad pa'i rnam par rig pa las nyan pa'i rnam par rig pa rnams skye bas 'di la nyes pa med do //

**0.1.3.1.1 〈śāstra〉定義**

【答論】語 (nāman, 名) の集まり (kāya, 身) と文章 (pada, 句) の集まりと音素 (vyañjana, 文) の集まりとして顕現する識が「**論書**」である。あるいはむしろ，超世間的な知識 (lokottarajñāna, 出世間智) を獲得せしめる特定の言葉として顕現する識が「**論書**」である。

【反論】どうして，識 (vijñapti) が説示されたり，語られたりし得ようか。

【答論】説かれた方（聖マイトレーヤ）と語られた方（師アサンガ）の識から諸々の聞くという識 (śravaṇavijñapti) が生じるから，ここに過失はない。

---

[11]Ya, Pa: *nāmapadavyañjanakāyaprabhāsā vijñaptayaḥ śāstram / atha vā lokottarajñānaprāpakaśabdaviśeṣaprabhāsā vijñaptayaḥ śāstram / kathaṃ vi*jñaptayaḥ praṇīyanta ucyante vā / praṇetṛvaktṛvijñaptiprabhavatvāt nāt*ra doṣaḥ /*

Bh/T: *nāmapadākṣarasamūhāvabhāsikā vijñaptayaḥ śāstram / atha vā lokottarajñānaprāpakaśabdaviśeṣāvabhāsikā* . . . (Ya) . . . / praṇetṛvaktṛprabhavatvāt prajñaptīnāṃ nā*tra doṣaḥ /*

Stch: . . . (Ya) . . . *praṇetṛvaktṛvijñaptiprabhavavāc chravaṇavijñaptīnām nātra doṣaḥ /*

Ms1, 7: ]jñaptīnāṃ nā[++++++]

---

[24]ming dang tshig dang yi ge'i tshogs, *nāmapadavyañjanakāya (Ya, Pa, Stch). 名身 (nāmakāya)・句身 (padakāya)・文身 (vyañjanakāya) は，いずれも心不相応行 (citta-viprayukta-saṃskāra) に包摂される。説一切有部の言語論については上杉 [1979] 参照。Cf. AKBh II 62, 11–14: viprayuktās tu saṃskārāḥ, prāptyaprāptī sabhāgatā/ āsaṃjñikaṃ samāpattī, jīvitaṃ lakṣaṇāni ca //35// nāmakāyādayaś ceti (36a) ime saṃskārā na cittena saṃprayuktā na ca rūpasvabhāvā iti cittaviprayuktā ucyante / (櫻部 [1969: 301, 9–10]:「〔心〕不相応行は得と非得と同分と無想と〔二〕定と命と諸相と名身などとである。(二・三五，三六 a) これらの諸行は心と相応せず，また色を自性としないから心不相応といわれる), AKBh II 80, 11–15: nāmakāyādayaḥ katame / nāmakāyādayaḥ saṃjñāvākyākṣarasamuktayaḥ / (47ab) ādigrahaṇena padavyañjanakāyagrahaṇam / tatra saṃjñākaraṇaṃ nāma / tadyathā rūpaṃ śabda ity evamādiḥ / vākyaṃ padaṃ yāvatārthaparisamāptis, tadyathā anityā bata saṃskārā ity evamādi, yena kriyāguṇakālasaṃbandhaviśeṣā gamyante / vyañjanam akṣaraṃ, tadyathā a ā ityevamādi / (櫻部 [1969: 346, 6–11]:「〔先の本偈 (二・三六 a) にいう〕「名身など」とは何か。名身などとは名辞と章句と音節との集まりである。(二・四七 ab) などの語によって句〔身〕と文身とが含まれる。その中で，名とは名辞である。例えば「色」「声」などという如きである。句とは章句である。〔少なくともそれは一つの〕意味を完全に現し得るだけのもの〔でなくてはならない〕。例えば「諸行は実に無常である」という如きである。それによって動作や性質や時称（テンス）についての〔それぞれ〕特殊な関係が了解される。文とは音節である。例えば a, ā などの如きである」)

snang ba, *pratibhāsa, *ābhāsa. Cf. ViK17a–b' 2, 9: uktaṃ yathā tadābhāsā vijñaptiḥ; D3b5: dper na der snang rnam rig bzhin / bshad zin（「それ（対象）としての顕現をもつ識がどのように〔生起する〕かについては既に述べた」）, ViV 5, 27: rūpapratibhāsā vijñaptir...; D6a5: gzugs su snang ba'i rnam par rig pa...（「色かたちなどとして顕現する識は…」）

[25]'jig rten las 'das pa'i yer shes thob par byed pa'i, *lokottarajñānaprāpaka° , *lokottarajñānaprāpaṇa° .

[26]nyan pa'i rnam par rig pa, *śravaṇavijñapti (Stch). Cf. ViṬ[D192a4]: de bzhin du dam pa dang dam pa ma yin pa'i chos smra bar 'dod pa'i dbang gis nyan pa rnams kyi dam pa dang / dam pa ma yin pa'i chos kyi rnam pa'i rnam par rig pa 'byung gi / phyi rol na sgra ni med de /（「同様に，(3) 正しい教えや (4) 不正な教えを語りたいという欲求の影響力によって，〔正しい教えや不正な教えを〕聴聞する人々に，正しい教えや不正な教えの形象をもつ識（表象）が生じるのであって，外界に語が存在するのではない」）

[27]当該箇所 (jñaptīnāṃ nā) を，Ya, Pa は Ms 確認不可とするが，確認可。

**0.1.3.1.2**

**0.1.3.1.2.1**

MVṬ[Ya2, 20–3, 2; Bh/T4, 11–13; Pa4, 10–12; Ms1, 7][12]

*śiṣ*yaśāsanāc **chāstram** [28] / *śiṣyaśāsanaṃ hi śīlasamādhiprajñāviśeṣotpādanāt* [29] *kāyavāṅmanāṃsy*[30] [Ya3] *asamyakkarmaṇo*[31] *nivartayati samyakkarmaṇi*[32] *pravartayati ca /*

MVṬ[D190a5–6; P20b4–5]

slob ma 'chos pa'i phyir **bstan bcos** te /[17] slob ma 'chos pa[18] ni tshul 'khrims dang / ting de 'dzin dang / shes rab kyi khyad par bskyed pa'i phyir / lus dang ngag dang yid tshogs par mi 'byung ba'i las las bzlog pa dang / tshogs par 'byung ba'i las la 'jug pa'o //

---

[12]Ya: *śiṣyaśāsanāc chāstram, śiṣyaśāsanaṃ hi śīlasamādhiprajñāviśeṣotpāditatvāt kāyavāṅmanasāṃ saṃbhārānutpattikarmaṇo nivartate saṃbhārotpattikarmaṇi ca pravartate /*

Pa: *śiṣyadhārmiko hi śīlasamādhiprajñāviśeṣotpādāt kāyavāṅmanas saṃbhārān* . . . (Ya) . . . /

Na: *śiṣya*sya śāsanāc chāstra*m* / . . . (Ya) . . . /

Bh/T: *śaikṣadharmāṇāṃ śīlasamādhiprajñānāṃ viśeṣeṇotpādanāt kāyavāṅmanasām asamyakkarmaṇo nivartanaṃ samyakkarmaṇi ca pravartanaṃ /*

Stch: *śaikṣadharmānām* . . . (Ya) . . . /

Ms1, 7: [++++++]yaśāsanāc chā[

---

[28]当該箇所 (yaśāsanāc chā) を，Ya, Pa, Bh/T ともに Ms 確認不可とするが，長尾 [1978: 18, (p. 2. 2–21)] に指摘されているとおり，確認可。

[29]tshul 'khrims dang ting de 'dzin dang shes rab kyi khyad pa, *śīlasamādhiprajñāviśeṣa (Ya, Pa). Cf. ŚS 339–340: raśmi viśeṣavatī yada muñcī tāya prabhāsaya codita satvāḥ / śīlaviśeṣa samādhiviśeṣaṃ prajñaviśeṣa śṛṇonti jinānāṃ // śīlata agra samādhita agro prajñata agra mahāmunirājā / ya stuta varṇita bodhinidānaṃ tena viśeṣavatī prabha labdhā // ratnaviyūha ya osari raśmi tāya prabhāsaya codita satvāḥ / (Bendall & Rouse [1981: 300, 11–16]: 'They emit the Most Excellent Ray, by which brightness people are moved. They hear the excellent virtue, the excellent meditation, the excellent wisdom of the Conquuerors: chief in virtue, chief in meditation, chief in wisdom is thee great royal sage, who is praised and lauded as the cause of enlightenment; thus the Most Excellent brightness is accomplished' ).

slob ma 'chos pa'i phyir bstan bcos te, *śiṣyaśāsanāc chāstram (Ya). Cf. AKBh I 2, 1: śiṣyaśāsanāc chāstram /; D26a: slob ma 'chos pas na bstan bcos so // (櫻部 [1969: 136, 13–14]:「弟子を教える (śāsana) から「論書」(śāstra) なのである」)

[30]lus dang ngag dang yid, *kāyavāṅmanāṃsi, *kāyavāṅmanaḥ.

[31]tshogs par mi 'byung ba, *asamyakkarman (Bh/T), *asabhya° , *asatya° . tshogs par 'byung ba, *samyakkarman (Bh/T), *sabhya° , *satya° . ここでは，Bh/T の*samyak° , *asamyak° を採用するものとする。仏教文献に用例は多く見出されるが，チベット語訳の多くは yang dag pa'i las に対応する。Cf. AKV VI: samyakkarmāntaḥ; yang dag pa'i las kyi mtha'.

以下に挙げた，*sabhya, *asatya の用例は，tshogs par mi 'byung ba ではなく，tshogs par mi dbyung ba である。byung ba は，'byin pa (「引き抜く」,「引き出す」) の未来形であり，tshogs par dbyung ba は，文字通りには「集会に引き出される」という意味である。したがって，tshogs par dbyung ba'i las は「集会に引き合いにされても恥ずかしくない行為」，tshogs par 'byung ba'i las は「集会の中にあっても恥ずかしくない行為」という意味になろうか。いずれも，「〔規範に則った〕正しい行為」を意味する。

tshogs par dbyung ba, *sabhya. Cf. MVyut §245: 7195(925) sabhyaḥ, tshogs par dbyung ba, 出衆，令出従衆. 7194(926) asabhyaḥ, tshogs par mi dbyung ba, 不出衆，不令出従衆.

tshogs par mi dbyung ba, *asatya. Cf. BoBh 174, 17: asatyavacanāni ca na kathayaty api niratyayaiḥ paramaviśraṃbhopagatair vayasyakaiḥ /; 135b3–4 : skyon mi 'byung zhing mchog tu yid bstan par gyur pa'i grogs po dag la yang tshogs par mi dbyung ba'i tshig rjod par mi byed do //

なお，Ya, Pa は，tshogs pa の還梵として sambhāra を提案するが，sambhāra に相応するチベット語は tshogs であって，tshogs pa ではないから，ここでは妥当しないと思われる。Cf. AS 36, 5–6: saṃbhūtasaṃbhāras tīkṣṇendriyaḥ . . . ; D 107b: gang tshogs bsags pa dbang po rmon po . . .

[32]前注参照。

---

[17]D; P *om.* slob . . . te /

[18]D: slob ma 'chos pa; P: slob ma chos pa.

### 0.1.3.1.2 〈śāstra〉

#### 0.1.3.1.2.1 〈śāstra〉 第一解釈

弟子に〔戒・定・慧を〕教える手段である (śāsana)[6] から「**論書**」(śāstra)[7]〔と呼ばれる〕。実に，弟子に〔戒・定・慧を〕教える手段は，勝れた戒 (śīla)・定 (samādhi)・慧 (prajñā) を生み出すから，〔規範に則っていない〕正しくない行為から退かせ，〔規範に則っていない〕正しい行為へ向かわせる。

#### 0.1.3.1.2.2

MVṬ[Ya3, 2–12; Bh/T4, 14–23; Pa4, 12–20; Ms1, 8–2a1] [13]

*atha vā śāstralakṣaṇopapatteḥ* ***śāstram*** */ yad upadeśabhāvanayā*[33] *savāsanakleśā*n[34] pra*jahāti*[35]

[13]Ya: *atha vā* śāstralakṣaṇasya śāsanāc chāstram / [tac ca śā]stralakṣaṇaṃ yad upadeśo bhāsamāno ['bhyastaḥ] savāsanākleśaprahāṇāyā[padyate] nirantaradīrghavi*vidhatīvraduḥkhabhītayāś ca durgater bhavāc ca saṃtrāyate / tasmāt kleśaripuśāsanād bhavadurgatisaṃtārāc ca* śāstralakṣaṇaṃ / etac ca dvayam api sarvasmin mahāyāne sarvasmiṃś ca tadvyākhyāne vidyate nānyatreti / ata etac chāstram / āha ca / yac chāsti ca kleśaripūn aśeṣān saṃtrāyate durgatito bhavāc ca / tac chāsanāct [trāṇa]guṇāc ca śāstraṃ *etad dvayaṃ cānyamateṣu nāsti* //

Pa: . . . (Ya) . . . bhāsamānasarva kleśaprahāṇāya nirantaradīrgha*vividhatīvraduḥkhabhītyāś* . . . (Ya) . . . //

Na: . . . (Ya) . . . *tac ca śāstralakṣaṇaṃ* . . . (Ya) . . . //

Bh/T: *atha vā śāstralakṣaṇa*sya śāsanāc chāstram / [tac ca] śāstralakṣaṇaṃ yad upadeśena savāsanasarvakleśaprahāṇāya nirantaradīrghavi*vidhatīvraduḥkhabhītānāṃ durgatibhyo bhavāc ca rakṣaṇaṃ / tasmāt kleśaśatruprahāṇād drugatānāṃ bhavād rakṣaṇāc ca śā*stralakṣaṇaṃ / etac ca dvayam api sarvasmin mahāyāne sarvasmiṃś ca tadvyākhyāne vidyate nānyatra / tata etac chāstraṃ / . . . (Ya) . . . // iti /

Ob: . . . (Bh/T) . . . *durgatibhyo bhavāc chāstrāṇaṃ* / . . . (Bh/T) . . . /

Stch: *atha vā śāstralakṣaṇayogāc chāstram / tac ca śāstralakṣaṇaṃ yad upadeśābhyāsena savāsanasarvakleśaprahāṇāya nirantaradīrghavividhatīvraduḥkhabhayānakadurgatibhyo bhavāc ca trāṇam* / . . . (Bh/T) . . . /

Ms1, 8: ] śaprahāṇāy[++++] nirantaradīrghavi[, Ms2a1: |stralakṣaṇaṃ / etac ca dvayam api sarvasmin mahāyāne sarvasmiṃś ca tadvyākhyāne vidyate nānyatrety ata etac chāstraṃ / yac chāsti ca kleśaripūn aśeṣān saṃtrāyate durgatito bhavāc ca / tac chāsanā[

[33]lung mnos pa goms par byas pa, *upadeśabhāvanā. goms par byas pa の還梵として想定される abhyāsa (Stch) や bhāvanā のうち，次のような用例のある bhāvanā を採用する。Cf. IPV 3.1.1: tadetadaviyuktajñānakriyārūpaṃ kriyādvāreṇa sakalatatvarāśigatasṛṣṭisaṃhāraśatapratibimbasahiṣṇu yat tad upadeśabhāvanādiṣu tathābhāsamānam anābhāsam api vastutaḥ śivatattvam ity uktaṃ bhavati //1//,

Ts: śivatattve śāntātītā tasyopadeśabhāvanārcādau kalyamānatvāt // 10.9.

[34]bag chags dang bcas pa'i nyon mongs pa, *savāsanakleśa. spongs bar 'gyur ba, *prajahānti.

AKBh VII 414, 9: yadā śrāvakasyāpi śuśrūṣamāṇāśuśrūṣamāṇobhayeṣv ānandī na bhavaty āghaāto vā / kasmād ete āveṇikā buddhadharmā ucyante / savāsanaprahāṇāt /; D57a: gang gi tshe nyan thos dag kyang gus par nyan pa dang / gus par mi nyan pa dang / gnyig la kun du dga' ba'am / kun nas mnar sems mi 'byung ba na / ci'i phyir / 'di dag sangs rgyas kyi chos ma 'dres pa rnams zhes bya zhe na / bag chags dang bcas bar spangs pa'i phyir ro // (櫻部・小谷・本庄 [2004: 132, 4–7]:「〔教えを説くのに対して，その教えを〕よろこんで聞こうとする者とよろこんで聞こうとしない者とその両方である者たちとに対して，声聞でも喜びや憤りをもたずに〔正念・正知を持して〕いることはあるのに，何故にこれら〔三念住〕は不共不仏法と呼ばれるのか。〔声聞と異なって仏は，喜びや憤りだけでなくその〕習気をも併せて断じているからである」),

AKV VII 647, 26–29: savāsanaprahāṇād iti / savāsanānām ānaṃdyādīnāṃ prahāṇāt / kā punar iyaṃ vāsanā nāma śrāvakāṇāṃ / yo hi yatkleśacaritaḥ pūrvaṃ / tasya tatkṛtaḥ kāyavāgaceṣṭāvikārahetusāmarthaviśeṣaś citte vāsanety ucyate / avyākṛtaś cittaviśeṣo vāsaneti bhadanta anantavarmā / (櫻部・小谷・本庄 [2004: 134, 5–9]:「習気を併せて断じているからである。〔仏は〕喜び (ānandī) 等を，習気もろとも断じているからである。ではこの「習気」と呼ばれるものは何か。〔ある〕声聞たちに前世の，ある煩悩をおこす習慣（行）があるとき，そ〔の声聞〕にとっての，それ（煩悩を起こす習慣）によってつくられた，心・語の動揺をもたらす原因の特殊な能力が心にあれば，〔それが〕「習気」と呼ばれる。大徳アナンタヴァルマンは「習気とは，無記の，特殊な心である，と」主張する」),

MSABh XII 77, 14–15: tatra buddhā ajagaropamāsteṣāṃ svaśānter āsyapuṭaṃ dharmakāyaṃ / viśuddhivipulaṃ savāsanakleśajñeyāvaraṇaviśuddhitaḥ / sādhāraṇaṃ sarvabuddhaiḥ akṣayamātyantikatvāt /

[35]pra*jahāti*. 5 akṣara 以上と思われる。Cf. MVṬ 3, 9–10: yac chāsti ca kleśaripūn aśeṣān saṃtrāyate durgatito bhavāc ca /

[6]śās + LyuṬ. A. 3.3.117: karaṇādhikaraṇayoś ca.

[7]śās + ṢṭraN. A. 3.2.182: dāmnīśasyuyujastutudasisicamihapatadaśanahaḥ karaṇe.

nirantaradīrghavi*vidhatīvraduḥkhabhīmābhyām*[36] *durgatibhavābhyām saṃtrāyate,*[37] *ca tac chāstra-lakṣaṇam / tasmāt kleśaripuśāsanena durgatibhavatrāṇena ca* [Ms2a] *śā*stralakṣaṇam / etac ca dvayam api sarvasmin mahāyāne sarvasmiṃś ca tadvyākhyāne vidyate nānyatreti /

ata etac **chāstram** / āha ca /

yac chāsti ca kleśaripūn aśeṣān saṃtrāyate durgatito bhavāc ca /
tac chāsanā*t trāṇaguṇāc ca śāstram etad dvayaṃ cānyamateṣu nāsti //*[38]

iti /

MVṬ[D190a6–190b1; P20b6–8]

yang na bstan bcos kyi mtshan nyid du 'thad pa'i phyir **bstan bcos** te / lung mnos pa goms par byas pas bag chags dang bcas pa'i nyon mongs pa spongs bar 'gyur ba dang / bar chad med pa yun ring ba'i sdug bsngal drag po sna tshogs kyis 'jigs pa'i ngan song rnams dang / srid pa las skyob pa gang yin pa de ni bstan bcos kyi mtshan nyid do // de'i phyir nyon mongs pa'i dgra 'chos pa dang ngan 'gro dang srid [D190b] pa las skyob pas [(19)] bstan bcos kyi mtshan nyid de / de gnyis kyang theg pa chen po thams cad dang / de bshad pa thams cad la yod kyi gzhan la med do //[(20)]

de'i phyir 'di ni **bstan bcos** so // de la smras pa /

nyon mongs dgra rnams ma lus 'chos pa dang /
ngan 'gro srid [P21a] las skyob pa gang yin pa /
chos skyobs yon tan phyir na bstan bcos te /
gnyis po 'di dag gzhan gyi lugs la med //[(21)]

---

[36] bar chad med pa yun ring ba, *nirantaradīrghakāla. BCAP IX, PVV に用例がある。

BCAP IX 168, 12–15: tathā dātṛdeyapratigrāhakāditritayānupalambhayogena prajñāpariśodhitāḥ sādaranirantaradīrghakālam abhyasyamānāḥ prakarṣaparyantam upagacchantaḥ avidyāpravartitasakalavikalpajālamalarahitaṃ kleśajñeyāvaraṇavinirmuktam ubhayanairātmyādhigamasvabhāvaṃ sarvasvaparahitasaṃpadādhārabhūtaṃ paramārthatattvātmakaṃ tathāgatadharmakāyam abhinirvartayantīti prajñāpradhānā dānādayo guṇā ucyante//,

PVV 204, 3–6: yato bhāvanāyā bhāvyaspaṣṭatāyāṃ ādhipatyaṃ / yasmād bhūtam āryasatyādi abhūtam aśubhādi yad yad evātyantaṃ bhāvyate tad bhāvyamānaṃ bhāvanāyāḥ sādaranirantaradīrghakālapravarttitāyāḥ pariniṣpattau sphuṭā kalpadhīḥ sā phalaṃ yasya tat tathā / (285)

[37] sdug bsngal ... kyis 'jigs pa, *duḥkhabhīma.

dug bsngal ... kyis 'jigs pa の還梵として duḥkhabhīma が想定される。「苦をもたらすゆえに恐ろしい」(山口 [1935: 3, 7]:「苦に由りて怖畏せられたる」, Friedmann[1937: 1]: 'whici is made horrible by . . . pains') という意味に解することができる。DA 510, 32: yair laṅghitāstīvraviṣapracaṇḍā āśāprapātā bahuduḥkhabhīmāḥ //127//

ちなみに，duḥkhabhaya, duḥkhabhīta についても用例は見られるが，文脈にそぐわないので採用しないものとする。duḥkhabhaya について。AKV IV 397, 12–14: paṃcabhayāni / ājīvikābhayam aślokabhayaṃ pariṣacchāradyabhayaṃ maraṇabhayaṃ durgatibhayaṃ ca / tatrāślokabhayam akīrtibhayaṃ / parśacchāradyabhayaṃ sabhāyāṃ sāṃkucityaṃ /（舟橋 [1987: 288, 5–8]:「五つの恐怖を超えているからであるという中で，五つの恐怖は〔生活できないことを恐れる〕不活畏 (ājīvikābhaya) と，悪名畏 (aśloka-) と，怯衆畏 (pariṣac-chāradya-) と，死畏 (maraṇa-) と，及び悪趣畏 (durgati-) とである。その中で悪名畏は不名誉の畏れであり，怯衆畏は集会において委縮することである」)

duḥkhabhīta について。MSA XIX 173, 3–4: duḥkhāpaho duḥkhakaro na caiva duḥkhādhivāso na ca duḥkhabhītaḥ / duḥkhādvimukto na ca duḥkhakalpo duḥkhābhyupetaḥ khalu bodhisatvaḥ /,

BCA II 36, 10–11: tatsarvaṃ deśayāmyeṣa nāthānāmagrataḥ sthitaḥ kṛtāñjalir duḥkhabhītaḥ praṇipatya punaḥ punaḥ //

[38] ヴァスバンドゥの著作『釈軌論』の引用。PrP I 3, 3–4 にも引用されている。山口 [1959: 503, 6] 参照。但し，PrP I のチベット語訳には対応箇所がない。

---

[(19)] D; P: skyobs pas.

[(20)] P: do //; D: de.

[(21)] VY V 123a1–2: nyon mongs dgra rnams ma lus 'chos pa dang / ngan 'gro srid las skyob pa gang yin te / 'chos skyob yon tan phyir na bstan bcos te / gnyis po 'di dag gzhan gyi lugs la med /

### 0.1.3.1.2.2 〈śāstra〉第二解釈

あるいはまた，論書の特徴が妥当するから，「**論書**」(**śāstra**) である。教示内容の修習 (upadeśa-bhāvanā) によって，(1) 煩悩を潜在印象もろとも (savāsanakleśa) 除去すること，及び (2) 間断なき長期にわたって起こる様々な激しい苦をもたらすゆえに恐ろしい，〔三〕悪趣 (durgati) や〔輪廻的〕生存 (bhava) から守ることが，〈論書の特徴〉である。それゆえ，(1) 煩悩という敵の抑制 (kleśaripuśāsana) と，(2) 悪趣と生存からの〔衆生の〕救済 (durgatibhavatrāṇa) によって，論書が特徴づけられる。これら二つ〔の特徴は〕いずれも，全ての大乗（＝経）と全てのそれらの解説（＝論書）にはあるけれども，〔それら〕以外にはない。

したがって，本書は「**論書**」である。そのことについて〔師ヴァスバンドゥが『釈軌論』において次のように〕述べる

> 「煩悩という敵を残らず抑制し，悪趣と生存から〔衆生を〕救済するものは，抑制と救済を美質とするから，「論書」である。これら二つ〔の美質〕は〔大乗〕以外の教義にはない」

### 0.1.3.2

MVṬ[Ya3, 13–15; Bh/T4, 24–5, 1; Pa4, 21–22; Ms2a2][14]

***asyeti / triyānadvāreṇa saptavastusaṅ***grahasya kleśajñeyāvaraṇaprahāṇaprāpakasya madhyāntavibhāgakārikāśāstrasya hṛdi sthitatvād [Bh/T5] **asye**ti pratyakṣopadeśaḥ /

MVṬ[D190b1–3; P21a1–2]

**'di ni** zhes bya ba ni / theg pa gsum gyi sgo nas dngos po bdun du bsdus pa / nyon mongs pa dang shes bya'i sgrib pa spong ba thob pa dang / bstan bcos dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i tshig le'ur byas(22) pa 'di ni sems la gnas pa'i phyir dang **'di** zhes mngon sum du bstan to //

### 0.1.3.2 'asya'

「**この**」(**asya**) に関して。三乗によって七つの主題を包括し，煩悩という障害と所知に対する障害の断滅をもたらす『中辺分別論頌』(Madhyāntavibhāgakārikā) という論書が〔師ヴァスバンドゥの〕心にあるから，「**この**」というように，眼前にあるものとして指示されている (pratyakṣopadeśa)。

### 0.1.3.3

MVṬ[Ya3, 16–20; Bh/T5, 1–4; Pa4, 23–5, 2; Ms2a2–3][15]

**praṇetāram** iti / kartāram / yady apy ayaṃ dhātuḥ prāpaṇārthas *tathāpi praśabdayogāt viśeṣārthako draṣṭavyaḥ / tathā ca* [Pa5]

---

[14]Ya, Pa: *asyeti triyānadvāreṇa saptavastusaṃ*grahasya kleśajñeyāvaraṇaprahāṇaprāpakasya madhyāntavibhāgakārikāśāstrasya hṛdi sthitatvād asyeti pratyakṣopadeśaḥ /

Bh/T, Stch: *triyānamukhena* . . . (Ya) . . . /

Ms2a2: |grahasya kleśajñeyāvaraṇaprahāṇaprāpakasya madhyāntavibhāgakārikāśāstrasya hṛdi sthitatvād asyeti pratyakṣopadeśaḥ /

[15]Ya: praṇetāram iti, kartāram / yady apy ayaṃ dhātuḥ prāpaṇārthas tathāpi praśabdasaṃyogāt viśeṣārthako draṣṭavyaḥ / uktaṃ hi upasargeṇa dhātvartho balād anyatra nīyate / gaṅgāsalilamādhuryaṃ sāgareṇa yathāmbhasā //

Pa: . . . (Ya) . . . anyaḥ pratīyate / . . . (Ya) . . . //

Bh/T: . . . (Ya) . . . praśabdasaṃ*yoge* karaṇe draṣṭavyaḥ / . . . (Ya) . . . anyaḥ pratīyate / . . . (Ya) . . . //

Stch: . . . (Bh/T) . . . *praśabdasaṃvyāhṛtaḥ* karaṇe . . . (Bh/T) . . . /

Ms2a2: praṇetāram iti kartāraṃ / yad apy ayaṃ dhātuḥ prāpaṇārthas[, Ms2a3: |/ gaṅgāsalilamādhuryaṃ sāgareṇa yathāmbhasā /

---

(22)D; P *om.* pa'i tshig le'ur byas.

*upasargeṇa dhātvartho balād anyaḥ pratīyate /*
gaṅgāsalilamādhuryaṃ sāgareṇa yathāmbhasā //[39)]

iti /

MVṬ[D190b3–4; P21a2–4]

**rab mdzad la** zhes bya ba ni byed pa po'o // skad kyi dbyings 'di thob par byed pa yin mod kyi / 'on kyang rab kyi sgra dang sgrogs na byed par lta ste /

skad dbyings don kyi stobs ldan yang /
nye bar bsgyur bas zil non 'gyur /
gang gā'i chu ni mngar mod kyi /
rgya mtsho'i chu ni ji bzhin no //[(23)]

### 0.1.3.3 'praṇetāram'

「**説かれた方に**」(**praṇetāram**) とは「作者に」ということである。この動詞語根 nīは「到達させる」を意味するけれども，pra-と結びつくことに基づいて特殊な意味をあらわすものとして理解されるべきである。次のように言われる。

「動詞語根の意味は upasarga によって強制的に他の意味にされる。ガンジス川の水の甘さが海水によって〔強制的に塩辛くされる〕ように」

### 0.1.3.4

MVṬ[(Ya5, 4–5); Bh/T5, 5–6; (Pa5, 20–21); Ms2a3][16]

**abhyarhyety**[40)]abhyarcya abhitaḥ purataḥ sākṣād iva sthitam arhitvārcayitvā kāyavāṅmanobhiḥ /[41)]

(MVṬ[D191b5–6; P21b8]

**mngon mchod** ces bya ba ni rjed [(24)] pa'o // mngon par zhes bya ba ni mdun nas mngon sum dang 'dra bar gnas pa'o // mchod pa ni lus dang ngag dang yid kyis rjed pa'o[(25)] //)[(26)]

---

[16]Bh/T.
Ms2a3: abhyarhyety abhyarcya abhi‡‡taḥ purataḥ ⊗ sākṣād iva sthitam arhitvārcayitvā kāyavāṅmanobhiḥ /
Ya, Pa: - (Cf. Ya5, 4–5, Pa5, 20–21: abhyarhyety abhyarcya / abhitaḥ purataḥ sākṣād iva sthitaṃ / arhitvārcayitvā kāyavāṅgamanobhiḥ /)

---

39)出典不明。山口 [1935: 6, n. 3] に指摘されているように，上述の引用頌と同様，PrP I にも引用される。この偈頌にはチベット語訳に対応する箇所がある。PrP I 5, 2–3: upasargeṇa dhātvartho balād anyatra nīyate / gaṅgāsalilamādhuryaṃ sāgareṇa yathāmbhasā // 丹治 [98, n. 17; 103–105, n. 30] によれば，PrP における両偈頌は，チャンドラキールティによるものではなく，いずれも後代の挿入とされる。

40)abhyarhya について，Stcherbatsky [1936: 01, n. 7] は，'abhy-arcya-aty-arcya, cf. 5.5, perhaps abhy-arhya' として Bh/T のミススペルを指摘するが，Bh/T では 'abhyarhya' と正しく表記されているので無効な注である。

41)当該箇所は，チベット語訳では，0.1.3.7 'ca' の語義解釈と 0.1.3.8 'asmadādibhyaḥ' の語義解釈との間に挿入され (MVṬ[D191b5–6; P21b8])，Ya と Pa もそれに基づく (MVṬ[Ya5, 4–5; Pa5, 20–21])。ここでは Ms 及びそれに基づく Bh/T の順に従うものとする。当該箇所以降，写本とチベット語訳，各刊本の順はしばしば一致しないが，Bhāṣya の帰敬偈の順に語義解釈がなされる写本と Bh/T に基本的に準拠するものとする。

---

(23)PrP I D2b3: nye bar bsgyur ba'i dbang gis na // skad byings don ni yongs bsgyur te // gang gā'i chu ni mngar mod kyi // rgya mtsho chu yis ji bzhin no //

(24)D; rjes P

(25)D: rjed pa'o; P: brjes pa'o.

(26)当該箇所は，チベット語訳では，0.1.3.7 'ca' の語義解釈と 0.1.3.8 'asmadādibhyaḥ' の語義解釈との間に挿入される。

### 0.1.3.4 'abhyarhya'

**'abhyarhya'** とは，「敬礼して」(abhyarcya) という意味である。'abhitaḥ'，すなわち，〔ある方の〕「眼前で」—その方はあたかも姿を現して (sākṣāt) いるかのようである—，'arhitvā'，すなわち身口意をもって「敬礼して」という意味である。

### 0.1.3.5

### 0.1.3.5.1

### 0.1.3.5.1.1

MVṬ[Ya3, 21–4, 1; Bh/T5, 6–7; Pa5, 3–4; Ms2a3][17]

**sugatātmajam** iti / suṣṭhu *gataḥ savāsanakleśāvaraṇāj jñeyāvaraṇāc* [Ya4] *cāpratiṣṭhitaṃ nirvāṇam iti* ***sugataḥ*** /

MVṬ[D190b4–5; P21a4–5]

**bde gshegs nyid skyes** zhes bya ba ni / bag chags dang bcas pa'i nyon mongs pa'i sgrib pa dang / shes bya'i sgrib pa las mi gnas pa'i mya ngan las 'das par shin tu gshegs pas **bde bar gshegs pa**'o //

### 0.1.3.5 'sugatātmajam'

### 0.1.3.5.1 〈sugata〉

### 0.1.3.5.1.1 〈sugata〉第一解釈

**'sugatātmaja'**（「善逝体所生」）[8] に関して。〔仏陀は，〕煩悩障とその潜在印象という障害（煩悩障）(savāsanakleśāvaraṇa)[9] と所知に対する障害（所知障）(jñeyāvaraṇa)[10] とを放棄して，

[17]Ya: sugatātmajam iti suṣṭhu gataḥ savāsanākleśāvaraṇāj jñeyāvaraṇāc cāpratiṣṭhitaṃ ni*rvāṇam iti sugataḥ* /
Pa: . . . (Ya) . . . savāsanakleśāvaraṇāj . . . (Ya) . . . /
Bh/T: . . . (Ya) . . . savāsanakleśāvaraṇajñeyāvaraṇā*pratiṣṭhi*taṃ . . . (Ya) . . . /
Stch: . . . (Ya) . . . *savāsanakleśāvaraṇajñeyāvaraṇād apratiṣṭhitam* . . . (Ya) . . . /
Ms2a3: sugatātmajam iti / suṣṭhu[

[8]ātmaja について，Stcherbatsky は次のように指摘する。Stcherbatsky [1936: 06, n. 57]: 'ātmaja does not mean "a son", but "produced (-ja) out of the essence (ātma) of a Buddha", i.e. out of tathatā, śūnyatā'.

[9]煩悩障について，TrBh では次のように説明される。TrBh 15, 8–9: kleśā hi mokṣaprāpter āvaraṇam iti atas teṣu prahīṇeṣu mokṣo 'dhigamyate/（「なぜなら，諸煩悩〔障〕(kleśa) は，解脱の達成に関する障害であり，それ（煩悩障）が断滅されたならば，解脱が達成されるからである」）

[10]所知障について，TrBh では次のように説明される。TrBh 15, 9–11: jñeyāvaraṇam api sarvasmin jñeye jñānapravṛtti-pratibandhabhūtam akliṣṭam ajñānaṃ / tasmin prahīṇe sarvākāre jñeye asaktam apratihataṃ ca jñānaṃ pravartata ity ataḥ sarvajñatvam adhigamyate /（「所知障 (jñeyāvaraṇa) もまた，すべての知られるべきことに関する知的活動を妨害する汚染されていない無知である。もしそれ（所知障）が断滅されたならば，すべての知られるべきことに関して，執着がなく，妨げられない知的活動が行われる。したがって，一切知者の境涯を達成するのである」）

無住処涅槃 (apratiṣṭhitanirvāṇa) へとよく (suṣṭhu)[11]到達した者 (gata) であるから[12], **'sugata'** (「善逝」) [13]と呼ばれる。

---

[11]接頭辞 su-について，ここでは「よく」(suṣṭhu) という解釈が提示されている。Cf. AAĀ: apunarāvṛttya suṣṭhu gataḥ; slar mi ldogs par legs par gshegs pa (小野 [2001:372]「不退転に善く至るもの」)

PVV I や BCAP I などでは三種の su-の解釈が挙げられる。

PVV 59, 7–8: suśabdasya trividho 'rthaḥ (i) praśastatā surūpavat (ii) apunarāvṛttiḥ sunaṣṭajvaravat (iii) niḥśeṣatā ca apūrṇaghaṭavat //

BCAP 2, 6–7: suśabdas tu (i) praśastādyarthatrayavṛttiviśiṣṭaṃ suga . . . ; bde ba'i sgra ni mdzes pa la sogs pa don gsum la 'jug pas khyad par 'phags pa'i bde bar gshegs pa nyid gsungs so // (「一方，'su-' という語は，(i)「称賛に値する*」などの三種の意味に対する指示機能によって限定された善逝性が示されている」) *Tib:「美しい」(mdzes pa, śobhana).

[12]ここでは，他動詞 gam の過去分詞 gata を「二障 (A) を放棄して無住処涅槃 (B) へ行く」(A: leaving point, B: reaching point) と解釈する。動詞 gam に (1) 放棄 (tyāga), (2) 結合 (saṃyoga) という意味があることによる。Cf. Ogawa[2004:66]: 'According to Helārāja, for instance the action of going is a continuous flow of acts of leaving a certain point of space and reaching another (*tyāgopādānarūpāvicchinnapravāha*), which allows one to use a sentence like the following: (7) *devadatto grāmān nagaraṃ gacchati* 'Devadatta is going from the village to the city".

PVV や BCAP I などでは，su-gata の gata によって，善逝が凡夫らと区別されることを示すとする。特に，マノーラタナンディンは，上記注に挙げた三種の優越性によってそのことを説明する。

PVV 107, 5–8: (i) ye laukikabhāvanāmārgeṇa vītarāgā bāhyā atatvadarśinas tebhyaḥ tattvadarśitvād adhikaḥ / (ii) ye śaikṣā abāhyāḥ parihāṇidharmāṇas tebhyo 'punarāvṛttyā / (iii) ye cāśaikṣāḥ śrāvakā aprahīṇakleśavāsanā asākṣātkṛta-sarvvākāravastavas tebhyo niḥśeṣapratītyā /

BCAP 2, 4–6: sugatān ity atra gataśabdena sarvapṛthagjanebhyo bhagavatāṃ vyavacchedaṃ darśayati, teṣāṃ saṃsārāntargatatvāt, bhagavatāṃ tu saṃsāravinirgatatvāt / (「〔帰敬偈における〕「善逝たちに」について。ここでは，「到達した者」(gata) という語によって，すべての凡夫たちから世尊が区別されることを示すのである。彼ら（凡夫）は輪廻の中へ行くが，世尊は輪廻から離れているからである」)

[13]sugata（善逝）は仏陀の十種の名号の一つ。See MVyut §1: 7(7). PSV on PS I 1 や BCAP I などでは，接頭辞 su-の三種の解釈に基づいて，sugata の三種の意味，(i) praśastatā（「称賛に値すること」），(ii) apunarāvṛttitva（「〔輪廻に〕退転しないこと」），(iii) niḥśeṣatā（「残りのないこと」）が挙げられる。それぞれ，su-gata の接頭辞 su-を含む，(i) surūpa（「よい姿」），(ii) sunaṣṭajvara（「熱病からよくなった者」），(iii) supūrṇaghaṭa（「よく満たされた壷」）の特徴である。

PSV on PS I 1: rang don phun sum tshogs pa ni bde bar gshegs pa nyid kyis te / don gsum nye bar blang bar bya'o // (i) rab tu mdzes pa'i don ni skyes bu gzugs legs pa bzhin no // (ii) phyir mi ldog pa'i don ni rims nad legs par byang pa bzhin no // (iii) ma lus pa'i don ni bum pa legs par gang ba bzhin no // don gsum po de yang phyi rol ba'i 'dod chags dang bral ba dang / slob pa dang / mi slob pa rnams las rang don phun sum tshogs pa khyad par du bya ba'i phyir ro // (Hattori[1968:23]: 'Attainment of His own objectives is [evidenced] by [His] being *sugata* in the following three senses: (i) that of being praiseworthy (*praśastatva*), as is a handsome person (*surūpa*), (ii) the sense of being beyond a return [to *saṃsāra*] (*apunar-āvṛtty-artha*), as one who is fully cured of a fever (*sunaṣṭa-jvara*), and (iii) the sense of being complete (*niḥśeṣārtha*), as is a jar wholly filled (*supūrṇa-ghaṭa*). These three senses [of His title "*sugata*"] distinguish the Buddha's attainment of His objectives from that of non-Buddhists of subdued passions (*vīta-rāga*), from the attainment of those who are undergoing religious training (*śaikṣa*), and from that of those who are no longer in need of religious training (*aśaikṣa*)'). PVV などにおいても sugata の同様の三種の解釈が提示される。See Hattori [1968:75].

BCAP 2, 7–3, 5: tenāyam arthaḥ — raśastaṃ yathā bhavati evaṃ madhyamapratipadā kleśādyāvaraṇaprahāṇaṃ gatāḥ sugatāḥ / anena prahāṇasaṃpattir uktā / yadi vā / (i) praśastaṃ sarvadharmaniḥsvabhāvatātattvaṃ gatā adhigatāḥ sugatāḥ / anena adhigamasaṃpad upadarśitā / ya[di vā] . . . tīrthikaśāstṛbhyo bhagavatāṃ viśeṣaś copadarśito bhavati / teṣām ātmādibhāvābhiniveśavaśāt praśastagamanābhāvāt / ātmādīnāṃ ca pramāṇabādhitatvāt / saṃsārāpratipakṣatvāc ca apraśastaṃ gamanam / (ii) apunarāvṛttyā vā gatāḥ, punarjanmano rāgādinā . . . haṃkāraśuddhyā ahaṃkārabījasya avidyāyāḥ sarvathā prahāṇāt sugatāḥ/ anena srotāpannasakṛdāgāmibodhisattvebhyo 'pi bhagavatāṃ viśeṣo darśitaḥ / teṣāṃ praśastagamane 'pi sarvadhātvaprahāṇāt punarāvṛttisaṃbhavāt / (iii) niḥśeṣaṃ vā . . . sarvavāsanāyā api kāyavāgbuddhivaiguṇyalakṣaṇāyāḥ svayam adhigatamārgoktāv apāṭavasya vā sarvathā prahāṇāt sugatāḥ / このプラジュニャーカラマティの注釈は，先行するハリバドラに従うとされる。AAĀ などにおける該当箇所については小野 [2000:372–373] 参照。

**0.1.3.5.1.2**

MVṬ[Ya4, 1–5; Bh/T5, 7–11; Pa5, 4–6; Ms2a4][18]

*sa ca sa*rvasavāsanāvaraṇaprahīṇaḥ sarvathāsarvadharmāvabodhasvarūpaḥ sarvavibhūtyāśrayabhūtaś cintāmaṇiratnavad acintyaprabhāvavigrahaḥ sarvasattvānām anābhogena sarvā*rthān kartum yogyaḥ nir-vikalpakajñānaviśeṣātmakaḥ sugataḥ /*

MVṬ[D190b5–6; P21a5–7]

de yang bag chags kyi sgrib pa thams cad spangs pa / chos thams cad rnam pa thams cad du thugs su chud pa'i rang gi ngo bo 'byor pa thams cad kyi gnas su gyur pa / yid bzhin gyi nor bu rin po che ltar bsam gyis mi khyab pa'i mthu mnga' ste/ sems can thams cad kyi don thams cad lhun gyis grub par mdzad par spyod pa / rnam par mi rtog pa'i ye shes kyi khyad par gyi bdag nyid ni bde bar gshegs pa'o//

**0.1.3.5.1.2 〈sugata〉 第二解釈**

さらにまた，彼は，(1)〔煩悩〕障とその潜在印象をすべて断ち (sarvasavāsanāvaraṇaprahīṇa)[14]，(2) すべての存在要素を全面的に覚知することを本性とし (sarvathāsarvadharmāvabodhasvarūpa)[15]，(3) すべての自在力の拠であり (sarvavibhūtyāśrayabhūta)[16]，(4) 意のままになる宝珠 (cintāmaṇiratna)[17]のように不思議な能力を身体にもち (acintyaprabhāvavigraha)[18]，(5) すべての衆生にすべての利益 (sarvārtha) を努力なく (anābhogena) もたらすことができ[19]，(6) 卓

[18]Ya, Pa: sa ca sarvavāsanāvaraṇaprahīṇaḥ sarvathā sarvadharmāvabodhasvarūpaḥ sarvavibhūtyāśrayabhūtaś [cintāma]ṇiratnavad acintyaprabhāvavigrahaḥ sarvasattvānām anābhogena sarvārtha[ca]raṇasamartho nirvikalpakajñānaviśeṣātmakaḥ sugataḥ /

Bh/T: *sa ca sa*rvavāsanā° . . . (Ya) . . . /

Ms2a4: |rvasavāsanāvaraṇaprahīṇaḥ / sarvathāsarvadharmāvabodhasvarūpaḥ / sarvavibhūtyāśrayabhūta⊗ś cintāmaṇiratnavad acintyaprabhāvavigrahaḥ / sarvasattvānām anābhogena sarvā[

[14]Cf. LV XXVI 309, 17: sarvakleśavāsanāvaraṇasuprahīṇa ity ucyate /

[15]Cf. MV I. 2: na śūnyaṃ nāpi cāśūnyaṃ tasmāt sarvam vidhīyate / sattvād asattvāt sattvāc ca madhyamā pratipac ca sā //（「したがって，「すべてのものは空でもなく，空でないのでもない」といわれる。それは有であるから，また無であるから，さらにまた有であるからである。そしてそれが中道である」），

SP V. 53a–b: sarvadharmāvabodhāt tu samyaksaṃbuddha ucyate /（松涛・長尾・丹治 [1975: 169]:「それに反して，すべての法をさとっていることによって，正しいさとりを得た〔仏陀〕といわれる」），

LAS X. 239: manovijñānavyāvṛttaṃ cittaṃ kāluṣyavarjitam / sarvadharmāvabodhena cittaṃ buddhaṃ vadāmyaham //（安井 [1976: 264]:「意識が滅するとき，心は，汚濁をはなれ，一切法を覚知するが故に，わたくしは心を仏と語る」）

[16]vibhūti（自在力）について，TrBh や MSg では次のように説明される。

TrBh 42, 6: sarvāvaraṇavimokṣaṃ vibhutvaṃ labhate tadā //（「そのとき，あらゆる障害からの完全なる解放がある。自在なること (vibhutva) が獲得される」），

MSg (II) 102, 9–13: 'bras bu yongs su rdsogs pa'i gyur pa ni sgrib pa med pa rnams kyi ste / mtshan ma thams cad mi snang ba dang / shin tu rnam par dag pa'i de kho na snang ba dang / mtshan ma thams cad la dbang 'byor pa thob pa'i phyir ro //（長尾 [1987:303]:「(4) 結果が完全円満にせられたことによる転回 (paripūrṇaplalaparāvṛtti)。これは障害が全く無となった (anāvaraṇa) 人々〔仏陀たち〕の〔転依〕である。すなわちあらゆる相は現れることなく (nimittākhyāna)，極めて清浄な (suviśuddha) 真実が顕わとなり (tattvātattva)，かつあらゆる相に対して自由自在であることを得る (nimittavibhutvalābha) からである」）

[17]cintāmaṇiratna（「意のままになる宝珠」，「如意宝珠」）について BCAP I で言及される。

BCAP I 20, 10–11: bodhicittamahākaruṇācintāmaṇiratnarājamukuṭāvabaddhānāṃ bodhisattvānāṃ nāsti durgatyapāya-paropakramabhayam /（「菩提心と大悲という如意宝珠の王冠を戴いた菩薩には，他の悪趣による行為への恐怖がない」）

[18]Cf. TrBh 44, 20: acintyas tarkāgocaratvāt pratyātmavedyatvāt dṛṣṭāntābhāvāc ca /（「「不思議なもの」(acintya) とは，〔それが〕論理的思考の対象領域) ではないから，各自によって認識されるべきであるから，喩例 (dṛṣṭānta) が存在しないからである」）

[19]arthakaraṇa について，MVṬ V や AKV VI で次のように説明される。

MVṬ V 200, 1–3: anena hy ālambanena bodhisattvānām aśeṣaparārthakaraṇasamarthā bhavantītyataḥ parārthakaraṇa-sāmarthyahetutvam ālambanānuttaryaṃ /（山口 [1935: 319]:「此所縁によりて諸菩薩には他の〔有情の〕利益を残無

越した無分別智をもつ者 (nirvikalpakajñānaviśeṣātmaka)[20]として，「善逝」である。

**0.1.3.5.2**

**0.1.3.5.2.1**

MVṬ[Ya4, 5–7; Bh/T5, 11–12; Pa5, 7; Ms2a5][19]

*tasyātmaiva viśuddhatathatā / tajja*nitatvān nirvikalpasya jñānasya tasmāt tasmin vā jātaḥ sugatātmajaḥ tasmāt tasmin vā jātaḥ **sugatātmajaḥ** /

MVṬ[D190b6–7; P21a7]

de'i bdag nyid ni rnam par dag pa'i de bzhin nyid de / de las rnam par mi rtog pa'i ye shes rab tu byung ba'i phyir de las sam / der skye bas(27) na **bde gshegs nyid skyes** so //

**0.1.3.5.2 〈sugatātmaja〉**

**0.1.3.5.2.1 〈sugatātmaja〉 第一解釈**

清浄なる真如 (viśuddhatathatā)[21] が彼（善逝）のまさに身体（ātman）である。なぜなら，無分別智が彼（善逝）から生じるから。「それ（清浄なる真如）から」，もしくは「そこ（清浄なる真如）に」生じた者が，**'sugatātmaja'**（「善逝子」）である[22]。

---

[19]Ya: [tadātmatvaṃ viśuddhitathatā /] tajjanitatvān nirvikalpasya jñānasya tasmāt tasmin vā jātaḥ sugatātmajaḥ /
Pa: tajjanitatvān . . . (Ya) . . . /
Bh/T: tadātmā viśuddhitathatā tatprabhavatvān . . . (Ya) . . . /
Ms2a5: |nitatvān nirvikalpasya jñānasyā tasmāt tasmin vā jātaḥ sugatātmajaḥ

---

(27)D: skye bas; P: skyes pas.

---

く作す能力あるが故に，夫故に他の利益を作す能力あることの因性は所縁無上義なり」)，
AKV VI 573, 19–20: ata eva sa iti / svārthaparisamāpteḥ / sa parārthakaraṇārhatvād arhan / parārthakaraṇayogyatvād ity arthaḥ / (櫻部・小谷 [1999: 299, 8–12]: 「まさにそのゆえに彼は，〔すなわち〕自己の利益を成し遂げているゆえに彼は，利他をなすにふさわしい (arhat) から「阿羅漢」である。利他を行ずることに適しているから〔阿羅漢だという〕意味である」)
anābhogena（「努力なく」「内発的に」）について，MSA IX で言及されている。
MSA IX. 19a–b 37, 10: yathā maṇer vinā yatnaṃ svaprabhāsanidarśanaṃ /;
SAVBh IX.19a-b 47, 15–48, 5: lhun gyis grub par sems can gyi don mdzad pa nor bu'i dpe bstan pa'i phyir / ji ltar nor bu 'bad med par // rang gi 'od ni bstan pa ltar // zhes bya ba smos te / dper na nor bu rin po che la sogs pa nor bu rnams las 'od byung bas na nor bu 'di ltar bdag gis 'od 'byung bar bya'o snyam du bsam pa dang / 'bad rtsol med par yang 'od snang ba de bzhin du zhes bya ba'i don to //（西蔵文典研究会 [1979:24]:「〔仏は〕無効用にして有情の利益を為すことを摩尼珠の隠喩によって示すために，「たとえば摩尼珠から精勤なくして，それ自身の光が現れるように」(I.19c–d) と説く。たとえば，宝珠などの諸摩尼珠より光が生ずるが，摩尼珠は「このように自分が光りを放とう」という考えや精勤や効用がなくして光は現れる，その如くである，という意味である」)

[20]Cf. ViV 9, 15–16: yadā tu tatpratipakṣalokottaranirvikalpajñānalābhāt prabuddho bhavati tadā tatpṛṣṭhalabdhaśuddhalaukikajñānasaṃmukhībhāvād viṣayābhāvaṃ yathāvad avagacchatīti samānam etat //（「しかし，もし，それ（誤った概念構想の繰り返しによって染み込んだ潜在印象）に対抗する (pratipakṣa, 対治)，〈概念構想を伴わない超世間的な知識〉(nirvikalpalokottarajñāna, 無分別出世間智) を獲得することによって〔人が〕目覚めたならば，その場合，〈それ（概念構想を伴わない超世間的な知識）の後に獲得される清浄なる世間的な知識〉(pṛṣṭhalabdhaśuddhalaukikajñāna, 後得清浄世間智) が現前することによって，対象が存在しないことをあるがままに覚知するのである。したがって，これ（〈概念構想を伴わない超世間的な知識〉の獲得によって目覚める場合）は〔夢から目覚める場合と〕等しい」)

[21]viśuddhatathatā と nirvikalpa の関係について，MSABh XIX. 43–46 では次のように言及されている。
MSABh 168, 3-4: satyavyavasthānaṃ tu saptavidhāṃ tathatām āśritya pravṛttitathatāṃ lakṣaṇatathatāṃ vijñaptitathatāṃ saṃniveśatathatāṃ mithyāpratipattitathatāṃ viśuddhitathatāṃ samyakpratipattitathatāṃ ca /

[22]あるいは，「「それ（清浄なる真如）を父として」(tasmāt)，「それ（清浄なる真如）を母として」生じた者が，'sugatātmaja' である」という読みも可能であろうか。チベット語訳にしたがえば，「「それ（清浄なる真如）から」，もしくは「そこ（清浄なる真如）に」生じたならば，'sugatātmaja' である」となろう。

**0.1.3.5.2.2**

MVṬ[Ya4, 8–16; Bh/T5, 12–20; Pa5, 8–13; Ms2a5–7][20]

atha vā sugatātmanā jāta iti **sugatātmajaḥ** / yathoktaṃ sūtrāntare—

jāto bhavati ta*thāgatavaṃśe tadātmakadharmapratilambheneti* /[42)]

*evaṃ sati bodhisattvasya daśabhūmau pratiṣṭhitasya* sarvākāraṃ jñeyaṃ vastu karatalastham ivāmalakaṃ tanvaṃśukāvacchāditalocanasyevābhāsam āyāti / bhagavataḥ punar apanītalocanāvaraṇasyevety ayaṃ viśeṣa*ḥ* /

*atra hi* ***sugatātmaja*** *iti tasyaiva śāstrapraṇetur adhigamasaṃpat*[43)] *pradarśitā lābhasatkāranirape*kṣasya śāstrapraṇetṛtvena karuṇāsampat prajñāsaṃpac ca /

MVṬ[D190b7–191a3; P21a7–21b3]

yang na bde bar gshegs pa nyid du skyes pas / **bde gshegs nyid skyes** te / mdo gzhan las

de'i bdag nyid kyi chos rab tu rnyed pas / de bzhin gshegs pa'i gdung du skyes [D191a] pa yin no

zhes ji skad gsungs pa lta bu'o // de lta [P21b] bas na byang chub sems dpa' sa bcu pa la rab tu gnas pa ni / shes bya'i dngos po'i rnam pa thams cad skyu ru ra lag mthil du gzhag pa[(28)] / dar la srab mos g-yogs pa'i mig la snang ba bzhin no // bcom ldan 'das kyis[(29)] ni mig gi sgrib pa bsal ba bzhin te / 'di ni khyad par ro //

---

[20]Ya: atha vā sugatātmanā jāta iti sugatātmajaḥ / yathoktaṃ sūtrāntare jāto bhavati tathāgatavaṃśe tadātmakavastu *pratilābhād iti / evaṃ sati bodhisattvasya daśamyāṃ bhūmau pratiṣṭhitasya* sarvākāraṃ jñeyaṃ vastu karatalastham ivāmalakīphalaṃ śukāvac chāditalocanasyevābhāsam āyāti / bhagavataḥ punar apanītalocanāvaraṇasyevety ayaṃ viśeṣaḥ / atra hi sugatātmajas *tasyaiva śāstrapraṇayanasyāvabodhasaṃpat pradarśitā lābhasatkāranirape*kṣasya śāstrapraṇetṛtvena karuṇāsaṃpat prajñāsampac c[eti] /

Pa: . . . (Ya) . . . ivāmalakaṃ tattvaṃśukāvac . . . (Ya) . . . *śāstrapraṇetur avabodhasaṃpat* . . . (Ya) . . . ca /

Bh/T: . . . (Ya) . . . tathā[gatavaṃśe] . . . (Ya) . . . jñeyavastu karatalastham ivāmalakaṃ tanvaṃśukāvac. . . (Ya) . . . atra *śāstrapraṇetus tattvāvabodhasampadaṃ nirdeṣṭuṃ* sugatātmajam iti / *lābhasatkāra°* . . . (Ya) . . . ca /

Ob: . . . (Bh/T) . . . *atra śāstrapraṇetus tattvāvabodhasaṃpan nirdeśaḥ* . . . (Bh/T) . . . /

Stch: . . . (Bh/T) . . . / *atra sugatātmaja iti śāstrapraṇetus tattvāvabodhasampan nirdiṣṭā, lābhasatkāranirapekṣapraṇetṛtvena karuṇāsampat prajñāsampac ca nirdiṣṭā* /

Ms2a5: atha vā su⊗gatātmanā jāta iti sugatātmajaḥ / yathoktaṃ sūtrāntare jāto bhavati ta[, Ms2a6: | sarvākāraṃ jñeyaṃ vastu ‡‡karatalastham ivāmalakaṃ tanvaṃśukāvacchāditalocanasye⊗vābhāsam āyāti / bhagavataḥ punar apanītalocanāvaraṇasyevety ayaṃ viśeṣa[, Ms2a7: kṣasya śāstrapraṇe ‡‡tṛtvena karuṇāsaṃpat prajñāsampac ca /

---

[42)]*tadātmakadharmapratilambha. Cf. DBhS IV 38: tatra bhavanto jinaputrā arciṣmatyā bodhisattvabhūmeḥ sahapratilambhena bodhisattvaḥ saṃvṛtto bhavati tathāgatakule tadātmakadharmapratilambhāya daśabhir jñānaparipācakair dharmaiḥ / (荒牧 [1974:120]:「さて，みなさん，仏子たちよ，このようにして「光明に輝く」菩薩の地を体得するや，そのときそのまま，かの菩薩は，如来の家系にあって如来そのひとでもある存在を得るようになっていく。というのは，十種のさとりの知恵を円熟させる実践があるからである」），

MVṬ V 205, 9–11: prathamā hi bhūmir bodhisattvānāṃ darśanamārgasaṅgagṛhītā tatpraveśāc ca jātau *tathāgatasyotpannaḥ tad a*nukūlatadātmakadharmapratilambhād iti sūtrapāṭhaḥ /; D290b5: sa dad po byang chub sems dpa' rnams kyi mthong ba'i lam du bsdus pa der zhugs na / de'i bdag nyid kyi chos rab tu thob pa'i phyir / de bzhi gshegs pa'i rigs su skyes pa yin no zhes mdo las 'byung ngo //

[43)]thugs su chud pa phun sum tshogs pa, *adhigamasaṃpat. 各刊本はいずれも，thugs su chud pa phun sum tshogs pa を，avabodhasampat と還梵するが，avabodhasaṃpat の用例が見られないことと，adhigamasaṃpat の用例は多く，しかも BCAP I では sugata の根拠のひとつとして挙げられていることから，ここでは adhigamasaṃpat が適当であると考えられる。BCAP I 1, 18: anena adhigamasaṃpad upadarśitā /; 'dis ni rtogs pa phun sum tshogs pa bstan to //

---

[(28)]D: gzhag pa; P: bzhag pa.

[(29)]P; D: kyi.

'dir ni **bde bar gshegs pa'i bdag nyid las skyes pa**s / bstan bcos mdzad pa de kho na thugs su chud pa phun sum tshogs par bstan pa dang / rnyed pa dang bkur sti la mi blta bar bstan bcos mdzad pas / thugs rje phun sum tshogs pa dang / shes rab phun sum tshogs par bstan pa'o //

### 0.1.3.5.2.2 〈sugatātmaja〉 第二解釈

あるいはまた，善逝自体として生じたから，'**sugatātmaja**' と呼ばれる。たとえば，別の経中[23]に〔次のように〕述べられている。

「〔彼 (善逝子＝菩薩) は,〕それ (善逝＝如来) を本質とするダルマ (tadātmakadharma) を得ること (pratilambha) によって，如来の家系 (tathāgatavaṃśa)[24]に生まれた」

このような場合，第十地[25]に住する菩薩には，知られるべきことが，全面的に，あたかも掌のなかにあるアーマラカの果実 (āmalaka) のように，〔ありありと〕顕現する。この場合，〔菩薩は〕薄布に眼が覆われた人 (tanvaṃśukāditalocana) と同じである。一方，世尊は，眼に対する障害が取り除かれた人 (apanītalocanāvaraṇa) と同じである。このような違いが〔菩薩（善逝子）と世尊（善逝）との間に〕ある。

実に，ここにおいて，「**善逝子**」というこの語によって[26]，『論書』を説かれたほかならぬその方（聖マイトレーヤ）が完全な理解力 (adhigamasaṃpat) をもつことが示されている。さらに，物欲と名誉欲と (lābhasatkāra, 利養讃歎)[27]を期待しない方が『論書』を説かれた方であるから，完全なる悲 (karuṇāsaṃpat, 悲円満) と完全なる智慧 (prajñāsaṃpat, 慧円満) とを有することもまた〔間接的に〕示されている。

### 0.1.3.6

MVṬ[Ya4, 17–20; Bh/T5, 20–23; Pa5, 14–16; Ms2a7][21]

**vaktāram** iti vyākhyānasya kartāram / **abhyarhye**ti sambadhyate / **sugatātmajam** ity apīty apare / sa punar āryāsaṅgaḥ / *tatra hy āryamaitreyādhiṣṭhānād dharmasrotasā*[44)] *abhimukhībhavad idaṃ śāstram uktam /*

[21]Ya, Pa: vaktāram iti vyākhyānasya kartāram / abhyarhyeti saṃbadhyate / sugatātmaja ity apīty apare / sa punar āryāsaṅgaḥ / tasya hīdaṃ śāstram abhivyaktaṃ ākhyātaṃ cāryamaitreyādhiṣṭhānāt dharmas*aṃtānena /*

Bh/T: . . . (Ya) . . . / tatrāryamaitreyādhiṣṭhānād dharme*ṇa paramparayā śāstram idam āvirbhūtam ucyate /*

Ob: . . . (Ya) . . . *tatrāryamaitreyādhiṣṭhānād dharmasrotasā* . . . (Bh/T) . . . /

Stch: . . . (Ya) . . . *tatrāryamaitreyādhiṣṭhānād dharmasrotasā śāstram idam āvirbhūyoktam /*

Ms2a7: vaktāram iti vyākhyānasya kartāraṃ / abhyarhyeti sambadhyate / sugatātmajam ity apīty apare / sa punar āryāsaṅga[

44)chos kyi rgyun, *dharmasrotas (Ob, Stch). dharmasrotas（「法流」）というこの語は，Obermiller [1933: 1027, n. (Page5, note45)], Stcherbatsky [1936: 07, n. 71] の指摘するとおり，止観のある状態を示す術語として捉えるべきである。

[23]出典不明。

[24]tathāgatavaṃśa について，DBhS で次のように説明される。DBhS 12: tathāgatakule 'navadyo bhavati sarvajātivādena vyāvṛtto bhavati / sarvalokagatibhyo 'vakrānto bhavati lokottarāṃ gatiṃ sthito bhavati / bodhisattvadharmatāyāṃ suvyavasthito bhavati bodhisattvāvasthānena samatānugato bhavati tryadhvatathāgatavaṃśaniyato bhavati sambodhiparāyaṇaḥ /

[25]ここで第十地とは，菩薩位第十地の最終地である法雲地であり，一切智を得る境地である。十地 (daśabhūmi) とは，菩薩が修行すべき五十二の段階のうち，特に第四十一位から第五十位までであり，歓喜地・離垢地・発光地・焔慧地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地の十段階。Cf. MVBh II 36, 5–6: karmavaśitāśrayatvaṃ daśamyāṃ yathecchaṃ nirmāṇaiḥ sattvārthakaraṇāt / (長尾 [1976: 263, 2–4]:「(10) 第十〔地〕においては，「行為の自在性のよりどころであること」に〔通暁する〕。〔知の力によって仏陀と同じように〕種々の変化身をもって，思いのままに衆生に対する利益のはたらきをなすからである」)

[26]ここでは，マイトレーヤが善逝子の三種の-saṃpat という特徴，すなわち (1) 完全な理解力 (adhigamasaṃpat), (2) 完全な悲 (karuṇāsaṃpat, 悲円満), (3) 完全な智慧 (prajñāsaṃpat, 慧円満) を備えていることが示されている。(1)adhigamasaṃpat については上注参照。

[27]物欲と名誉欲と (lābhasatkāra, 利養讃歎) によって心が乱されると退転する。Cf. AKBh VI 375, 13–14: arhato 'py aham ānanda lābhasatkāram antarāyakaraṃ vadāmi ity atra sūtre dṛṣṭadharmasukhavihāramātrād eva parihāṇir uktā /（櫻部・小谷 [1999: 371, 10–11]:「アーナンダよ，利得と〔他者から〕恭敬〔を受けること〕とは阿羅漢にとっても障碍である，と私は説く」)

MVṬ[D191a3–4; P21b3–5]

**'chad pa** ni bshad par byed pa ste / **mngon par mchod** ces bya ba dang sbyar ro // kha cig na re **bde gshegs nyid las skyes pa** zhes kyang bya'o zhe'o //(30) de ni 'phags pa thogs med do //(31) de la ni 'phags pa byams pa'i byin gyis brlabs(32) kyis na / chos kyi rgyun gyis bstan bcos 'di mngon du gyur cing bshad do //

### 0.1.3.6 'vaktāram'

**'vaktāram'**（「語られた方に」）という語は，「注釈の著者に」という意味である。〔'vaktāram' という語は〕**'abhyarcya'**（「礼拝して」）という語と結びつく。別の者は，「**'ātmajam'**（「善逝子に」）という語もまた〔'abhyarcya' という語と結びつく〕」と〔解釈する〕。さらに，彼（語られた方）は聖アサンガである。実に，本『論書』は，彼（師アサンガ）に聖マイトレーヤが加持したこと (adhiṣṭhāna) によって，法流 (dharmasrotas)〔三昧〕によって彼（師アサンガ）に現前化したので，〔彼（師アサンガ）によって〕述べられたのである[28]。

---

dharmasrotas という語は MSA XIV. 3 や MSg IV. 2 などに所出し，この法流三昧において菩薩は諸仏から教授を受けるとされる。これに対するスティラマティ注によれば，順決択分 (nirvedhabhāgīya) 中の世第一法 (laukikā-agradharma) 位における三昧を，特に法流三昧 (dharmasrotas-samādhi) と呼び，その三昧において加行道に入った菩薩は初地に到達するための教授を諸仏から受ける。MSA における法流三昧の詳細については小谷 [1984:120–123] 参照。

MSA 90, 13–14: dharmasrotasi buddhebhyo 'vavādaṃ labhate tadā / vipulaṃ śamathajñānavaipulyagamanāya hi //; SAVBh 235, 8–10: chos kyi rgyun las sangs rgyas las // shi gnas rnam par rgyas pa dang // ye shes rgyas par 'gyur ba'i phyir // de tshe lung bstan thob par 'gyur //（小谷 [1984:145]:「その時〔かの菩薩は〕法流〔三昧〕において，諸仏から，止 (śamatha) と智 (jñāna) とが広大となるように広大なる教誡を得る」），

SAVBh 235, 10–21: gong du bshad pa ltar mos pa spyod pa'i sar mos pa dang dad pa 'phel ba dang / bsod nams dang ye shes kyi tshogs bsags pa dang / sdom pa rnam par dag pa dang / theg pa chen po la lta ba drang ba dang / thos pa mang ba dang / sgrib pa spangs pa ste / lus dang sems las su rung bar byas pa'i byang chub sems dpa' chos kyi rgyun gyi ting nge 'dsin la gnas nas sangs rgyas rnams las sa dang po thob par bya ba'i don du bstan pa dang gdams pa'i lung thob par 'gyur te / lung de yang shi gnas rnam par rgyas par bya ba dang lhag mthong rnam par rgyas par bya ba'i phyir lung nod par byed de / ye shes kyi sgras ni lhag mthong la bya'o // sa dang po thob par 'gyur ba'i lam 'jig rten gyi chos mchog gi ting nge 'dsin la chos kyi rgyun gyi ting nge 'dzin ces bya'o //（小谷 [1984:145]:「上記のように信解行地において，信解即ち浄信が増大し，福徳と智慧の資糧を積集し，律儀を浄め，大乗において見解を正し，多聞にして障碍を断じた〔菩薩〕，つまり心身が行に堪える者 (karmaṇya) となった菩薩は，法流三昧 (dharmasrotassamādhi) に住して，諸仏から，初地に達するための教誡教授である聖教を得る。そしてその聖教は，止が広大なりとなり観 (vipaśyanā) が広大となる為のものなのである。その聖教を受けるのである。「智 (jñāna)」という語は観を意味する。初地に達する道である世第一法の三昧を法流三昧というのである」），

MSg (II) 70, 16–27: byang chub sems dpa' rnams dag gis / . . . / snga logs su yang chos rgyun der / sangs rgyas rnams ni mthong bas na /. . .（長尾 [1987:110]:「諸の菩薩たちは，…以前にも，またこの法の流れ (dharmasrotas) においても，諸の仏たちにお会いできたからであって，…」）

さらに，MSA XI.11 で，この法流三昧が，十八種作意の第十四，領受作意 (pratīcchakamanaskāra) として説明される。MSABh 58, 1–2: pratīcchako yo dharmasrotasi buddhabodhisatvānāmantikādavavādagrāhakaḥ /

---

(30)D: zhe'o //; P: zhes /.

(31)D: do //; P: de /.

(32)P; D: byin rlabs.

---

[28] この法流 (dharmasrotas) と呼ばれる止観は菩薩が諸仏から教授を受ける場であるが，ここでは，アサンガがマイトレーヤに見える場であることが示され，二者の関係が明らかにされる。Stcherbatsky は，この一文から MV の実際の著者 'the real author' がアサンガであることが示唆されていると指摘する (Stcherbatsky [1936: 06–07, n. 72])。この二者の関係について，同様のことが Chos 'byung においても描写されている。

Chos 'byung [D69a1–2]: 'jig rten kun la phan phyir thogs med ces bya ba // chos rgyun ting 'dzin stobs kyis drangs pa'i bdud rtsi'i rgyun // 'phags pa mi pham zhal gyi bum pa nas blugs pa / gsan pa'i snyim pas gsol ba de la phyag 'tshal lo // (Obermiller [1932: II.141]: 'I make my salutations to him who is called Asaṅga, / Who for the sake of helping the living beings, / Has secured, by the force of the Dharmasrotaḥ-samādhi, / The nectar of the Highest Doctrine that poured forth / From that precious vessell, — the mouth of the Saint Maitreya, / And has drunk it by means of his ears'.)

**0.1.3.7**

MVṬ[Ya4, 21–5, 1; Bh/T5, 23–24; Pa5, 17–18; Ms2a8][22]

*ceti* samuccaye pādapūraṇe 'dhikavacane vā / anyān api buddhabodhisattvān arcayitvā na kevalaṃ praṇetāraṃ vaktāraṃ [Ya5] **ceti** /

MVṬ[D191a5; P21b6](33)

**yang** zhes bya ba ni bsdu ba 'am / rtsa ba bskangs pa 'am / lhag pa'i tshig ste / mdzad pa dang 'chad pa nyi tshe la ma yin gyi / sangs rgyas dang byang chub sems dpa' gang yang rung ba dag la mchod par bya'o(34) //

**0.1.3.7 'ca'**

**'ca'** という語は，(1) 接続 (samuccaya)，あるいは (2) 音節充足 (pādapūraṇa)[29]，あるいはむしろ，(3)〔言及されていない〕付加的なものに言及する (adhikavacana) ために〔用いられている〕[30]。「説かれた方（師マイトレーヤ）と語られた方（師アサンガ）だけではなく，**さらに**〔言及されていない〕別の仏陀と菩薩とにもまた敬礼して」という意味である[31]。

**0.1.3.8**

MVṬ[Ya5, 1–3; Bh/T5, 25–26; Pa5, 18–19; Ms2a8][23]

kebhyo vaktāram /

**asmadādibhya** iti vayam ādir yeṣāṃ *te 'smadādayas tebhyaḥ*45) */ anenātmāvisaṃvādād*46) *uddiṣṭaṃ*47) *darśitam /*

---

[22]Ya, Bh/T, Pa.

Ms2a8: | samuccaye pādapūraṇe adhikavacane vā / anyān api buddhabodhisattvān arcayitvā na kevalaṃ praṇetāraṃ vaktāraṃ ceti /

[23]Ya: kebhyo vaktāram, asmadādibhya iti vayam ādir yeṣāṃ te 'smadādayas tebhyo 'smadādibhyaḥ / anenā*tmano 'mṛṣāyā upadeśo bhāsamāno nirdiṣṭaḥ /*

Pa: . . . (Ya) . . . */anenātmana upadeśasyāmṛṣātvaṃ vyajyate /*

Bh/T: . . . (Ya) . . . 'smadādibhyaḥ /*

Ms2a8: kebhyo vaktāraṃ asmadādibhya iti vayam ādir yeṣā[

*Bh/T ではチベット語訳 (D191a4–5; P21b5–6: 'di ni . . . ston to //) に対応する箇所の還梵がなされていない。

---

45)Ya, Bh/T, Pa が最後に付加する *''smadādibhyaḥ'* は不要。

46)bdag nyid kyi mi slu ba, *ātmāvisaṃvāda. Cf. LV IV 23, 20–21: satyaṃ dharmālokamukhaṃ devamanuṣyāvisaṃvādanatāyai saṃvartate / bhūtaṃ dharmālokamukhamātmāvisaṃvādanatāyai saṃvartate /; D33a: bden pa ni chos snang ba'i sgo ste / lha dang mi rnams la mi slu bar 'gyur ro // yang dag pa ni chos snang ba'i sgo ste / bdag la slu ba med par 'gyur ro // (外園 [1994: 750, 18–19]:「〈誠実（真諦）〉は法明門にして，天神や人間を欺くことなからしむ。〈真実〉は法明門にして，自己を欺くことなからしむ」)

47)lung mnos pa, *uddiṣṭa. Cf. BBh 176, 19–20: uddiṣṭānām udgṛhītānāṃ dharmāṇāṃ cira-kṛta-cira-bhāṣitasya caikadā vismaraṇāt /; D167a7–167b1: chos lung mnos pa dang / bzung ba dang / byas nas yun ring du lon pa dang / smras nas yun ring du lon pa dag kyang ched 'ga' brjed pas na / (宇井 [1961: 379(右段), 30-35]:「示教され受持せられた諸法と，長く実行され長く話された方とを一時忘失するから」)

---

(33)D191a4–5; P21b5–6: su la 'chad pa zhe na / bdag sogs la zhes bya ba ste / bdag thog mar byas pa gang yin pa de dag ni bdag la sogs pa ste / 'di ni bdag nyid kyi mi slu ba las lung mnos par ston to //

(34)D: par bya'o; P: bya ba'o.

---

29ca の用法について。Avyayakośa 338: "ca" anvācaya-samāhāra-itaretarayoga-samuccaya-viniyoga-tulyayogitā-avadhāraṇa-hetu-pādapūraṇa-yadyarthādiṣu vartate 'yam /

30チベット語訳にしたがえば，「'ca'〔という語〕は，(1)〔文法的〕接続 (bsdu ba, *samuccaya)，あるいは (2) 完備 (tsa ba bskangs pa, *paripūraṇa)，あるいは (3)〔言及されていない〕付加的なものに言及する (hag pa, *adhikavacana)〔ために用いられている〕」となろう。

31ここで，スティラマティは選択肢 (3) に基づく解釈を提示している。Cf. Kāśikā on A.2.4.18: anuktasamuccayārthaś cakāraḥ /

(MVṬ[D191a4–5; P21b5–6]

su la 'chad pa zhe na /

**bdag sogs la** zhes bya ba ste / bdag thog mar byas pa gang yin pa de dag ni bdag la sogs pa ste / 'di ni bdag nyid kyi mi slu ba las lung mnos par ston to //)(35)

### 0.1.3.8 'asmadādibhyaḥ'

【問】〔師アサンガは〕誰のために〔本『論書』を〕語られたのか。
【答】「**我々をはじめとする者たちのために**」（'asmadādibhyaḥ'）と言われている。〔'asmadādibhyaḥ' というこの語は〕「我々をはじめとする者たち」というように分析される〔Bahuvrīhi 複合語 'asmadādi' の〕与格複数形である。この語（'asmadādibhyaḥ'）によって，〔本『論書』が，アサンガによってアサンガ〕自身を欺くことなく (ātmāvisaṃvādāt) 提示されたことが示されている[32]。

### 0.1.3.9

MVṬ[Ya5, 5–9; Bh/T5, 26–6, 3; Pa5, 21–24; Ms2b1][24]

*śāstrasya praṇetāraṃ* [Ms2b] vaktāraṃ [Bh/T6] cābhyarcya kiṃ kariṣyasīty āha / **yatiṣye 'rthavivecana** iti / yatnam ārapsye **'rthavivecane** 'rthavivaraṇe pṛthagbhāvakaraṇe vā / iyaṃ ca nimittārthā saptamī / arthavivecananimittam ity arthaḥ //

MVṬ[D191a5–7; P21b7–22a1] (36)

bstan bcos mdzad pa dang 'chad pa la mngon par mchod nas ci zhig bya zhe na / **don rnams dbye phyir 'bad par bya** / zhes bya ba smos so // **don dbye** ba'i **phyir** ram / don dgrol ba'i phyir ram / so sor dbye ba'i phyir bsgrim par bya ba'i phyir zhes bya ba 'di ni rgyu'i don [P22a] te / don rnam par dbye ba'i rgyur zhes bya ba'i tha tshig go //

### 0.1.3.9 'yatiṣye 'rthavivecane'

【問】『論書』を説かれた方（師マイトレーヤ）と語られた方（師アサンガ）とに礼拝して，君（ヴァスバンドゥ）は何をなそうとするのか。
【答】このことについて〔ヴァスバンドゥは次のように〕述べる。「〔七〕**主題を分析するために，私（ヴァスバンドゥ）は尽力しよう**」と。

**'arthavivecane'**，すなわち「主題を解説するために」(arthavivaraṇe)，また，「〔主題を〕分析するために」(pṛthagbhāvakaraṇe)，「努力をなそう」(yatnam ārapsye) という意味である。そして，ここ（'arthavivecane'）には，根拠・目的 (nimitta) を意味する第七格 (saptamī) が用いられている。「主題を分析することを目的として」という意味である[33]

---

[24]Ya5, 4–5, Pa5, 20–21: abhyarhyety abhyarcya / abhitaḥ purataḥ sākṣād iva sthitaṃ / arhitvārcayitvā kāyavāṅmanobhiḥ /, Ya5, 5–9; Pa5, 21–24: *śāstrasya praṇetāraṃ* vaktāraṃ cābhyarcya kiṃ kariṣyasīty āha / yatiṣye 'rthavivecana iti / yatnam ārapsye 'rthavivecane 'rthavivaraṇe pṛthagbhāvakaraṇe vā / iyaṃ ca nimittārthā saptamī / arthavivecananimittam ity arthaḥ /
Bh/T: . . . (Ya) . . . / yatiṣye 'rthavivecane yatnam . . . (Ya) . . . /
Ms2b1: | vaktāraṃ cābhyarcya kiṃ kariṣyasīty āha / yatiṣye arthavivecane yatnam ārapsye / arthavivecane arthavivaraṇe pṛthagbhāvakaraṇe vā / iyaṃ ca nimittārthā saptamī arthavivecananimittam ity arthaḥ [

(35)当該箇所は，チベット語訳では，0.1.3.6 'vaktāram' の語義解釈と 0.1.3.7 'ca' の語義解釈の間に挿入される。

(36)[D191a5–6; P21b7]: mngon mchod ces bya ba ni rjed (D; rjes P) pa'o // mngon par zhes bya ba ni mdun nas mngon sum dang 'dra bar gnas pa'o // mchod pa ni lus dang ngag dang yid kyis rjed (D; brjes P) pa'o //

---

[32]自らを欺くことなく「提示された」(lung mnos pa, *uddiṣṭa) 対象は『論書』であり，著者（アサンガ）ではない。Cf. 山口 [1935: 5, 9–10]:「我には不虚誑なるによりて教の明瞭になることあり，と示せるなり」; Stcherbatsky [1936: 9, 33–35]: 'Being himself infallible (he possesses the authority) to give instruction (in the right comprehension of the text)'.

[33]チベット語訳には saptamī に対応する語がない。チベット語訳にしたがえば，「「主題を分析するために」(don dbye ba'i phyir, *arthavivecane)，「主題を解説するために」(don dgrol ba'i phyir, *arthavivaraṇe)，または「〔主題を〕分析する (so sor dbye ba'i phyir, *pṛthagbhāvakaraṇa) 努力をなそうとするために」というこの語は根拠を意味する」となろう。

**略号及び参考文献** (中辺分別論』及び『中辺分別論釈疏』については「1. 文献情報」(103–4 頁) を見よ。)

### (1) 一般的略号

**D** sDe dge edition of Tibetan translation

**P** Peking edition of Tibetan translation

**T** 『大正新脩大蔵経』 (大正新脩大蔵経刊行会)

**Tib** Tibetan translation.

* 写本不鮮明箇所

() 不鮮明であるが推定可能な akṣara を含む

‡ 写本訂正箇所, 抹消の痕跡

⊗ string hole

- 空白

+ 写本欠損箇所

[ ] 写本欠損箇所を含む

| 行頭 (行末はいずれも破損)

### (2) 一次文献

**A** Aṣṭādhyāyī (Pāṇini).

**AAĀ** Abhisamayālaṃkārālokā (Haribhadra), ed. by Uurai Wogihara, *Abhisamayālaṃkārālokā Prajñāpāramitā-vyākhyā, The Works of Haribhadra* (『梵文現観荘厳論より見たる般若波羅蜜多釈 : 梵文八千頌般若釈』) 東洋文庫, 1932 (再版 : 山喜房佛書林, 1973) .

**AKBh** Abhidharmakośabhāṣya (Vasubandhu): Prahlad Pradhan, ed. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu.* Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

**AKBh(Tib)** Abhidharmakośabhāṣya (Vasubandhu): D No. 4090, Ku 26a1–258a7.

**AKV** Abhidharmakośavyākhyā (Yaśomitra): Unrai Wogihara, ed. *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra.* Tokyo:1932–36. Reprint, 1989.

**AKV(Tib)** Abhidharmakośavyākhyā (Yaśomitra): D No. 4092, Gu 1b1– Ngu 333a7.

**Apte** The Practical Sanskrit-English Dictionary, Prin. Vaman Shivaram Apte, ed. Poona: 1957. Reprint Rinsen Book Co., 1986.

**AS** Abhidharmasamuccaya (Asaṅga): V. V. Gokhale, ed. "Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga", *Journal of the Royal Asiatic Society*, Bombay branch, New Series 23, 1947, pp. 13–38.

**AS** Abhidharmasamuccaya (Asaṅga): D No. 4049, Ri 44b1-120a7.

**AsP** Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā: P. L. Vaidya, ed. *Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā*, Buddhist Sanskrit Texts No. 4. Darbhanga: The Mithila Institute, 1960.

**Avyayakośa** Avyayakośa. Madras: Sanskrit Education Society, 1971.

**BoBh** Bodhisattvabhūmi ("Maitreya"): Unrai Wogihara, ed. *Bodhisattvabhūmi: A Statement of Whole Course of the Bodhisattva Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi* (『梵文菩薩地経』). Seigo Kenkyukai, 1936. Reprint, 山喜房佛書林, 1971.

**BoBh(Tib)** Bodhisattvabhūmi ("Maitreya"): D No. 4037, Wi 1b1–213a7.

**BCA** Bodhicaryāvatāra (Śāntideva). See BCAP.

**BCAP** Bodhicaryāvatārapañjikā (Prajñākaramati): P. L. Vaidya, ed. *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, Buddhist Sanskrit Text No.12. Darbhanga: The Mithila Institute, 1960.

**BCAP(Tib)** Bodhicaryāvatārapañjikā (Prajñākaramati): D No. 3872, La 41b1–288a7.

**Bh/T** See MVṬ(Bh/T).

**CS** Carakasaṃhitā (Agniveśa): Vaidya Jadavaji Trikamji Acharya, ed. *Charakasamhita by Agnivesa ; revised by Caraka and Dṛdhabala ; with the Āyuraveda-Dīpikā commentary of Cakrapāṇidatta,* Kashi Sanskrit Series No. 228. Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan, 1994.

**Chos 'byung** Chos 'byung (Bu ston): Eugene Obermiller, ed. See Obermiller [1932].

**DA** Divyāvadāna: P. L. Vaidya, ed. *Divyāvadana*, Buddhist Sanskrit Texts No. 20. Darbhanga: The Mithila Institute, 1959.

**DBhS** Daśabhūmikasūtra: Ryuko Kondo, ed. Daśabhūmiśvaro nāma Mahāyānasūtram: the memorial publication of two thousand five hundredth birthday of Gautama the Buddha. Tokyo: Rinsen Book Co., 1936.

**HB** Hetubindhu (Dharmakīrti): E. Steinkellner, ed. *Dharmakīrti's Hetubinduḥ.* Teil 1. Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text. Wien, 1967.

**IPV** Īśvarapratyabhijñāya (Abhinavagupta): K. A. Iyer and K. C. Pandeya, eds. *A Commentary on the Īśvarapratyabhijñāvimarśinī of Abhinavagupta*, 2 Vols, The Princess of Wales Sarasvati Bhavana Text Nos. 70 and 83. Allahabad:1938–1950. Reprint, Motilal Banarsidass, 1986.

**KĀ** Kāvyādarśa (Daṇḍin): Rangacharya Raddi Shastri, ed. *Kāvyādarśa of Daṇḍin.* Government Oriental Seriess, Class A, No. 4. Poona: Bhandarkar Oriental Institute, 1970 (2nd ed.).

**Kāśikā** Kāśikā (Vāmana and Jayāditya): Aryendra Sharma and Khanderao Deshpande, eds. *Kāśikā: A Commentary on Pāṇini's Grammar.* 2 vols. Hyderabad: Sanskrit Academy, 1969–70.

**LAS** Laṅkāvatārasūtra ("Jñānaśrībhadra"): P. L. Vaidya, ed. *Laṅkāvatārasūtra.* Buddhist Sanskrit Texts No. 3. Darbhanga: The Mithila Institute, 1963.

**LV** Lalitavistara: P. L. Vaidya, ed. *Lalitavistara*, Buddhist Sanskrit Text No.1. Darbhanga: The Mithila Institute, 1958.

**LV** Lalitavistara: D No. 95, Kha, 1b1–216b7.

**MHK** Madhyamakahṛdaya (Bhavya): Chr. Lindtner, ed. *Madhyamakahṛdaya of Bhavya.* Adyar: The Adyar Library and Research Centre, 2001.

**MSA** Mahāyānasūtrālaṃkāra ("Maitreya"). See MSABh.

**MSABh** Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya (Vasubandhu): Sylvain Lévi, ed. *Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra: Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule.* Tome I Texte. Paris: Librairie Honore Champion Press, 1907. Reprint, Rinsen Book Co., 1983.

**MSg** Mahāyānasaṃgraha (Asaṅga): (I) 長尾雅人 『摂大乗論一和訳と注解：上巻一』 (講談社, 1982) 巻末 1–106 「チベット語訳『摂大乗論』とその還元梵文」. (II) 長尾雅人 『摂大乗論一和訳と注解：下巻一』( 講談社, 1987) 巻末 57–126 「チベット訳『摂大乗論』第三章－第十章の校訂テキスト」.

**MVyut** Mahāvyutpatti: Yumiko Ishihama, Yoichi Fukuda, eds. *Mahāvyutpatti, A New Critical Edition of the Mahāvyutpatti, Sanskrit-Tibetan-Mongolian Dictionary of Buddhist Terminology.* Tokyo: The Toyo Bunko, 1989.

**NBh** Nyāyabhāṣya (Vātsyāyana): Anantalal Thakur, ed. *Nyāyadarśana of Gautama with the Bhāṣya of Vātsyāyana, the Vārttika of Uddyotakara, the Tātparyaṭīkā of Vācaspati and the Pariśuddhi of Udayana.* Mithila Institute Series, Ancient Text 20. Darbhanga, 1967.

**NM** Nyāyamañjarī (Jayanta Bhaṭṭa): Vidwan K.S. Varadacharya, ed. *Nyāyamañjarī with Ṭippaṇī Nyāyasaurabha*, 2 Vols., Oriental Research Institute Series No. 139, Mysore: Oriental Research Institute, 1969, 1983.

**NVTṬ** Nyāyavārttikatātparyaṭīkā (Vācaspatimiśra). See NBh.

**Ob** See Obermiller [1933].

**PrP** Prasannapadā (Candrakīrti): L. de la Vallée Poussin, ed. *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti.* Bibliotheca Buddhica 4. 1903–13. Reprint, Tokyo, 1977.

**PrP(Tib)** Prasannapadā (Candrakīrti): D No. 3860, Ha 1b1-200a7.

**PS** Pramāṇasamuccaya (Dignāga).

**PSV** Pramāṇasamuccayavṛtti (Dignāga): No. 5701, Ce 13a6–93b7.

**PVV** Pramāṇavārttikavṛtti (Manorathanandin): *Rāhula Sāṅkṛtyāyana, ed. Ācārya-Dharmakīrteḥ Pramāṇa-vārttikam ācārya-Manorathanandikṛtayā vṛttyā saṃvalitam (Dharmakīrti's Pramāṇavārttika with a commentary by Manorathanandin).* Appendix to Journal of Bihar and Orissa Research Society (Patna) 14–16 (1938–40).

**PVSVṬ** Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā (Karṇakagomin): Rāhula Sāṅkṛtyāyana, ed. *Ācārya-Dharmakīrteḥ Pramāṇavārttikam (svārthānumānaparicchedaḥ) svopajñavṛttyā, Karṇakagomiviracitayā taṭṭīkayā ca sahitam.* Allahabad, 1943. Reprint, under the title of Karṇakagomin's commentary on the Pramāṇavārttikavṛtti of Dharmakīrti, Kyoto: Rinsen Book Co., 1982.

**PVṬ** Pramāṇavārttikaṭīkā (Śākyabuddhi): D No. 4220, Nye 1b1–282a7.

**SP** Saddharmapuṇḍarīka-sūtra: H.Kern and Nanjo, eds. Bibliotheca Buddhica 10, St.Petersburg, 1908–1912.

**SAVBh** Sūtrālaṃkāravṛttibhāṣya (Sthiramati). IX 章については西蔵文典研究会 [1979], XIV 章については小谷 [1984] 参照。

**Stch** See Stcherbatsky [1936].

**ŚS** Śikṣāsamuccaya (Śāntideva): Cecil Bendall, ed. *Śikṣāsamuccaya:A Compendium of Buddhistic Teaching Compiled by Śāntideva Chiefly from Earliier Mahāyāna-sūtras.* Bibliotheca Buddhica I, 1897-1902; Reprint, Osnabrück: Biblio Verlag, 1970.

**TrBh** Triṃśikābhāṣya (Sthiramati): Sylvain Lévi, ed. *Vijñaptimātratāsiddhi: deux Traités de Vasubandhu: Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśikā (la Trentaine) avec le commentaire de Sthiramati.* Paris: Librarie Ancienne Honoré Champion Press, 1925.

**TrBh(Tib)** D No. 4055, Shi 146b2-171b6.

**TrK** Triṃśikākārikā (Vasubandhu). See TrBh.

**Ts** Tantrasāra (Abhinavagupta): Mukunda Ram Sastri, ed. *The Tantrasara of Abhinava- gupta.* Kashmir Series of Texts and Studies No. 17. Bombay: Nirnaya Sagara Press, 1918.

**TJ** Tarkajvālā ("Bhāviveka"): D No. 3856, Dza 40b7–329b4.

**ViK** Viṃśatikākārikā (Vasubandhu): See ViV.

**ViK(Tib)** Viṃśatikākārikā (Vasubandhu): D No. Shi 3a4–4a2.

**ViV** Viṃśatikāvṛtti (Vasubandhu): Sylvain Lévi, ed. *Vijñaptimātratāsiddhi: deux Traités de Vasubandhu: Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśikā (la Trentaine) avec le commentaire de Sthiramati.* Paris: Librarie Ancienne Honoré Champion Press, 1925.

**ViV(Tib)** Viṃśatikāvṛtti (Vasubandhu):D No. Shi 4a3–1a2.

**ViṬ** Viṃśatikāṭīkā (Vinītadeva): D No. 4065, Shi 171b7–195b6.

**VY** Vyākhyāyukti (Vasubandhu): D No. 4061, Shi 29a2–134b2.

**Ya** See MVṬ[Ya].

**中邊分別論** 真諦訳『中邊分別論』 2 巻, T No. 1599, Vol. 31.

**辯中邊論** 玄奘訳『辯中邊論』 3 巻, T No. 1600, Vol. 31.

**三彌勒經疏** 憬興訳『三彌勒經疏』 1 巻, T No. 1774, Vol. 38.

**梵語仏典** 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編『梵語仏典の研究』(平楽寺書店) 1990.

### (3) 二次文献

de Jong, J. W.

[1977] "Notes on the second chapter of the Madhyāntavibhāgaṭīkā", *Central Asiatic Journal*, Vol.21, No.2.

Hattori, Masaaki

[1968] *Dignāga, on perception: Being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramāṇasamuccaya, from the Sanskrit fragments and the Tibetan versions, translated and annotated.* Harvard Oriental Series 47. Cambridge: Harvard University Press.

Obermiller, Eugene

[1932] *History of Buddhism by Bu-ston: II. Part: The History of Buddhism in India and Tibet.* Materialien zur Kunde des Buddhismus 19. Heidelberg; Reprint, Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1964.

[1933] "Review of Madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyaṭīkā of Sthiramati: Being a Sub-commentary on Vasubandhu's Bhāṣya on the *Madhyāntavibhāgasūtra* of Maitreyanātha, ed. by Vidhushekhara Bhattacharya & Giuseppe Tucci", *The Indian Historical Quarterly*, Vol. IX, No. 3.

Ogawa, Hideyo

[2004] "Gamyate, Gamyamāna, Gata, Agata: the Mūlamadhyamakakārikā II, kk. 1–6 Re-examined", 『比較論理学研究』2, 広島大学比較論理学プロジェクト研究センター, pp. 63–75.

Stcherbatsky, Theodore

[1936] *Madhyanta-vibhanga: Discourse on Discrimination between Middle and Extremes Ascribed to Bodhisattva Maitreya and Commented by Vasubandhu and Sthiramati.* Bibliotheca Buddhica 30. Reprint, Delhi: Sri Satguru Publications, 1992.

Wayman, Alex

[1977] "Review of *Madhyāntavibhāgabhāṣya*, by Gadjin Nagao" *Indo Iranian Journal*, Vol. 19, No. 1. pp. 117–120.

荒牧 典俊

[1974] 『大乗仏典８：十地経』 中央公論社.

宇井 伯寿

[1961] 『梵漢対照菩薩地索引』鈴木学術財団.

上杉 宣明

[1979] 「阿毘達磨佛教の言語論 —名・句・文—」『仏教学セミナー』 30, pp. 26–45.

荻原 雲来

[1933] 『和訳称友倶舎論疏 1』梵文倶舎論疏刊行會.

小谷 信千代

[1984] 『大乗荘厳経論の研究』 文栄堂.

小野 妙子

[2000] 「入菩提行細疏における善逝 (Sugata) の語義解釈について」 『印度学仏教学研究』 49-1, pp. 134–136.

梶山雄一・丹治昭義

[1975] 『大乗仏典３：八千頌般若経』 中央公論社.

桂 紹隆

[1994] 「カルナカゴーミン作『量評釈第１章復注』和訳研究（１）」 『広島大学文学部紀要』54, pp. 22–40.

金才權

[2006] 「『中辺分別論』の再校訂のために—第三章真実品を中心に—」 『印度学仏教学研究』 54-2.

西蔵文典研究会

[1979] 『西蔵文献による仏教思想研究 第1号』 東京.

櫻部建

[1969] 『倶舎論の研究 界・根品』 法蔵館.

櫻部建・小谷信千代

[1999] 『倶舎論の原典解明 賢聖品』 法蔵館.

櫻部建・小谷信千代・本庄良文

[2004] 『倶舎論の原典研究 智品・定品』 法蔵館.

丹治昭義

[1988]] 『中論釈 明らかなことばI』 (関西大学東西学術研究所 訳注シリーズ 4) 関西大学出版部

外園幸一

[1994] 『ラリタヴィスタラの研究 上巻』 大東出版社.

長尾雅人

[1963] 「カトマンドゥの仏教写本典籍」 『岩井博士古稀記念典籍論集』 岩井博士古希記念事業会.

[1976] 「中辺分別論」『大乗仏典 1 5 : 世親論集』 中央公論社.

[1978] 「『中辺分別論安慧釈』の梵文写本との照合—その第一章相品について—」『鈴木学術財団研究年報』 15.

[1982] 『摂大乗論—和訳と注解 : 上巻—』 講談社.

[1987] 『摂大乗論—和訳と注解 : 下巻—』 講談社.

早島理

[2003] 「弥勒菩薩と兜率天伝承」 『古典学の再構築—20世紀後半の研究成果総括と文化横断的研究による将来的展望—』 (平成10年度～14年度文部科学省科学研究費特定領域研究 (A)), pp.1–7.

平川彰

[1968] 「第四章 菩薩の修行の階位」 『初期大乗仏教の研究』 春秋社.

舟橋一哉

[1987] 『倶舎論の原典解明 業品』 法蔵館.

松涛誠廉・長尾雅人・丹治昭義

[1975] 『大乗仏典 4 法華経 I』 中央公論社

三穂野 英彦

[2003] 「*Madhyāntavibhāga* 第一章相品における理論と実践」 (広島大学博士論文)

安井広済

[1976] 『梵文和訳 入楞伽経』 法蔵館.

山口益

[1935] 『安慧阿闍梨耶造・中辺分別論釋疏』 破塵閣 (再版: 鈴木学術財団, 1966).

[1937] 『漢蔵対照弁中辺論 : 付・中辺分別論釈疏梵本索引』 破塵閣 (再版: 鈴木学術財団, 1966).

[1959] 「世親の釈軌論について —かりそめな解題というほどのもの—」 『日本仏教学会年報』 25, pp. 503–538.

山口益・舟橋一哉

[1955] 『倶舎論の原典解明 世間品』 法蔵館.

(まつおか　ひろこ，広島大学大学院文学研究科博士課程後期［インド哲学］)